

令和2年第4回（9月）出雲崎町議会定例会会議録

議事日程（第2号）

令和2年9月17日（木曜日）午前9時30分開議

第1 一般質問

本日の会議に付した事件

議事日程に同じ

○出席議員（10名）

| | | | |
|----|------|-----|------|
| 1番 | 小黒博泰 | 2番 | 中川正弘 |
| 3番 | 中野勝正 | 4番 | 高橋速円 |
| 5番 | 諸橋和史 | 6番 | 加藤修三 |
| 7番 | 三輪正 | 8番 | 安達一雄 |
| 9番 | 高桑佳子 | 10番 | 仙海直樹 |

○欠席議員（なし）

○地方自治法第121条の規定により説明のため出席した者の職氏名

| | |
|---------|-------|
| 町長 | 小林則幸 |
| 副町長 | 山田正志 |
| 教育長 | 佐藤亨 |
| 会計管理者 | 池田則男 |
| 総務課長 | 河野照郎 |
| 町民課長 | 金泉嘉昭 |
| 保健福祉課長 | 権田孝夫 |
| こども未来室長 | 矢川浩之 |
| 産業観光課長 | 大矢正人 |
| 建設課長 | 小崎一博 |
| 教育課長 | 矢島則幸 |
| 産業観光課参事 | 内藤良治 |
| 総務課参事 | 金泉修一 |
| 町民課参事 | 棚橋まゆみ |

○職務のため議場に出席した者の職氏名

| | |
|------|------|
| 事務局長 | 権頭昇 |
| 書記 | 関川理沙 |

◎開議の宣告

○議長（仙海直樹） ただいまから本日の会議を開きます。

（午前 9時30分）

◎一般質問

○議長（仙海直樹） 日程第1、一般質問を行います。

質問の通告がありますので、順次発言を許します。

◇ 加藤修三議員

○議長（仙海直樹） 最初に、6番、加藤修三議員。

○6番（加藤修三） 9月16日、第99代内閣総理大臣に菅義偉自民党総裁が選出されました。菅首相は、現場の声に耳を傾け、国のため、国民のために働く内閣をつくと述べられ、しっかりした国づくりを期待するところでもあります。私も町のため、町民のため、町の皆さんの声にしっかりと耳を傾け、よりよい町を目指し、今以上にしっかり仕事をしていきたいと思っております。

9月1日は防災の日で、各地で避難訓練が行われました。町消防団は、町民の生命、身体及び財産を災害から守るため、日夜消防、防災活動や巡回で町民の安全、安心を支えております。消防団員の皆様には、町民一同感謝しております。

さて、消防団は地域の安全、安心を支える地域防災の要であり、災害時だけでなく、平常時の防災巡回、火災、地震や風水害といった災害時には、初期消火をはじめ、住民の安否確認、避難誘導、河川の警戒など、様々な場面で消防団が出動するわけではありますが、当町の消防団の意義と消防団員の現状について伺います。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 加藤議員さんのご質問にお答えをいたしますが、この件につきましては平成31年の3月、三輪議員さんからもご質問をいただいたところでございます。消防団の皆さんには大変ご苦勞をおかけいたしておりますし、また団員確保には大変難儀をされているということで、本当にいろいろな意味で大変ご苦勞だなというふうに感じておるところでございます。

ご質問いただきました消防団員の現状ということでございますが、本町の消防団員の定数につきましては、既に申し上げておりますように、170名でございます。現在、実員数につきましては、女性団員が3人おりますし、災害時など特別なときにご出動いただく特別団員、この方が6人となっております。定数に対する不足数は、一昨年は4人でしたし、昨年は9人、本年度は残念ながら11人と増えておるといのが現状でございます。消防団の団員の確保、これはご質問とおりの喫緊の課題であるということは認識をいたします。定数に満たない分団につきましては、第4分団で6人、第

3分団が5人、第2分団が1人と、第1分団は1人増員、超過の状態であります。新潟県全般といたしましても大変厳しい状況でございまして、充足率は90.4%。最も高い市町村で99.6%という市町村もございしますが、最も低い市町村では78.6%。本町は93.5%、県平均を僅かに上回っておりますが、申し上げましたとおり、実際団員数は定足数に満たない。それに対する補充なり、いろいろご苦勞をかけておりますが、なかなか解決策が見当たらないという厳しい現実であることだけは認識いたしております。

○議長（仙海直樹） 6番、加藤議員。

○6番（加藤修三） 消防団員の欠員が年々大きくなって、4人、9人、11人と、こういう中でこのまま見ているわけにはいかないという状況ではあると考えるんです。それについて、やはりよそよりもいいとか悪いとかじゃなくて、うちはその目標があるのであれば、徹底してそれについて欠員なしという状態をつくりながら、災害時いろんな、火災も含めて対応できる体制を取る必要があると考えます。その中で、今回の台風でも第10号、大変な台風で、気象庁及び国土交通省が一緒になって大変な台風になると言っていた中で、欠員がある状態よりやっぱりいっぱいきちんと下にいるという中で、我々はいつ来ても何とかできそうだという形をつくらなければいけないと思うんです。要するに豪雨についても1時間当たり80ミリという降り方は過去に比べて1.7倍になっているということで、椎葉村で災害があったように、私たちの町も崖崩れが多々あるという中で、やはりこの欠員という状態は続いてはいけないし、増えていること自身がまずいけないかなど。そこまで分かっているのであれば、次のステップを打つ必要があると思うのですが、それについて町長の考えをお聞かせ願いたいのですが。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） ご指摘のように、団員数、団員の確保ということにつきましては、本当に試行錯誤しながら全力を挙げておるわけですが、しかしかつてのように望んで消防団に入るとい、そういう時代は過ぎてしまいました。要するに今社会様式、あるいはまた生活状態、あるいはまた勤めの関係等もございまして、皆さんもご理解いただいていると思うのですが、なかなか団員になるということになりますと、大変いろんな自分自身の責任もございまして、またいろいろな負担もあるということでもちゅうちょされておることが現実でございまして。そういう中に、各地区の分団におきましても、幹部の皆さんあるいは議員の皆さんもその地区のいわゆる後援会のいろいろご協力をいただいて、それぞれがご努力いただいて、関係といいましようか、該当する年齢の方々に協力を求めておられるところではございますが、なかなか努力をしてもご理解いただけないというのが現実でございまして、今加藤議員さんがおっしゃるように、最近の自然環境とか、いろいろな面からいたしましても、我々の想像を超える大きな自然災害等も発生する可能性もございまして、やはり常設消防はございまして、広域の中における自治消防の果たす役割は大変大きな使命を持ち、また期待もしておるというところではございますので、試行錯誤しながら全力を挙げて、

この団員数の確保という問題についてはさらに努力してまいらなければならないというふうに思っているわけでございますし、また団のほうでもいろいろとご協力をいただいているということでございますので、その辺の現状と置かれている環境なりをしっかりと理解をしながら、行政としてそれらの隘路をいかに解決しながら確保するかということについては大変厳しいです。私も今県の総合事務組合の役員をしておるんですが、今団員が本当に退職するということがどんどんと増えているんです。まだ本当に入って間もない方々が退職するということで、退職金の支給等が非常に金額大きくなっております。そういう点からいたしましても、大変現実には厳しいんです。でもしかし、厳しいからといって手をこまねいてはいられない。全力を挙げて、皆さんと力を合わせながら定数の確保なり、団員各位の皆さんのご協力を求めていきたいと。あるいは、これは地域の皆さんからご理解いただかなきゃ駄目なんです。家庭において若い人がよし、やろうかと思っても、保護者の皆さんがそういうわけにはいかないというような、理解を求められないという場合もあるんです。だから、地域の皆さんからもやっぱりご理解いただいて、消防団に対する、自治消防に対する団員の皆さんのご苦勞なり、あるいは使命をしっかりとご認識をいただいて、ご協力をいただくということが私は大切だと思います。そのことをまた皆さんも地域に帰られて、しっかりと住民各位にお伝えしたいと思います。

○議長（仙海直樹） 6番、加藤議員。

○6番（加藤修三） 消防団員の確保が非常に厳しいという中で、災害は大変大きくなる、団員は少なくなる、これは反比例しているんです。災害が大きくなれば、そこをもっと強化しなければいけないという考えですから、町民の方々の理解も必要なんですけども、やはりしっかりした確保を取っていかねばいけないと思うんですけども、確保するために消防団員になるための特典、これについて何かあるのかどうかと。うちの町もいろいろやっていると申しますが、いろんなところを見ると、長野だとかいろんなところも同じような形で登録したら町で5%の割引あるとかいろいろありますけども、その辺について町の特典、団員の特典についてお聞かせください。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 加藤議員さんおっしゃるように、本当をお願いをする以上は活動しやすい環境をやっぱり町が対応する、整備するということが最重要であるということは十分理解をしています。団員に対しては、大変ご苦勞いただいているわけでございますが、現状におきましては年額の報酬や出勤手当につきましては、消防団の活動実態に見合うような、あるいはまた県内の市町村等々の関係等も考慮しながら、適宜見直しを行いながら、できる限り団員各位のご苦勞に比べられるような支給体制を努めてまいりたいというふうに考えておりますし、また安全設備などにつきましても、毎年計画的に整備してまいっておるところが現状でございます。また、にいがた消防団員サポート制度といたしましては、消防団員とご家族が登録店舗において割引が受けられる制度もございまして、本町も20店舗の方からご登録をいただいておりますというのが現状でございます。その

ほか、本町では独自に消防団員のインフルエンザ等の接種費用等については助成をしておるというような現状でございます。いろいろ制度の中で対応はしておるんですが、直ちに消防団員の確保の問題を解消できるというふうには考えておりませんが、今後ともまた団員各位、いろいろ消防団の実情を十分考慮させていただきながら、活動環境の整備というものを見直しながら、また計画的に進めてまいらなければならないんじゃないかというふうに考えておるわけでございます。

また、申し上げておりますように、団員不足に対しましては、各分団におきましても団員の幹部の皆さん、あるいはまた行政の区長の皆さんからも、議員さんもそうですが、直接依頼をいただいているというような実情も伺っております。消防団の成り手不足というものは大変大きな課題であります。申し上げますように、今の生活環境なり、いろいろな関係からいたしますと、団員確保というものは大変厳しくなってくるというふうに考えております。そういう観点からいたしますと、先ほど来から申し上げますように、災害時における対応等につきましても、消防団員の皆さんの、特に一旦緩急があったときには、直ちに出勤するといっても、町内におられる団員は少ないわけでございますので、そういう点をどのような形でカバーするのかと。あらゆる観点から、やっぱり加藤議員さんおっしゃるように、あらゆる災害に対応しながら、消防団員もそうでございますが、行政としてもいかに住民の安全、安心の確保を図るかということに対しては一段と創意工夫を凝らしながら、やっぱりこの現実、実情の厳しいものを再認識をしながら、それを補完するというのが私たちに与えられた課題だと私は考えています。そういう意味で、皆さんと共にこの厳しい現実の中における課題をいかに解決するか、全力を挙げて進んでまいりたいと思います。

○議長（仙海直樹） 6番、加藤議員。

○6番（加藤修三） いろんな特典、家族割引手当、団員のインフルエンザの補助とかありますけど、やっぱり団員自身が魅力的な何か特典、特典で入ってもらおうというわけじゃないんですけども、入ってもらおうために、じゃこの町の中的环境を生かした中でいい特典はないのかというようなことで、例えば海の事故があつたりする部分もあつたりすると、ダイビングライセンスの取得、これの補助をすとか、また今スマホありますから、各団員がつながるような形でスマホの一部補助、通信費になるのか何か分かりませんが、補助とか、前回も言いましたように、100ボルトの電源の車を購入したときにはこういう補助がありますよとかいうことも含めて対応していただくのもいいかなと思うんです。先ほど町長が家族手当、インフルエンザの補助とか、これ町民どこまで知っているかね。やはりこの辺も、つるわけじゃないですよ。こういうのがあつるし、こうやって町のために皆さん頑張ってくれ、行政としても補助を出しているから、もっともっと皆さんも理解して頑張ってくれないかということも再度啓発していく必要があると思うんです。なかなかやっぱりよそのを見るといったって、聞きに行ったら、うちもありますよということで、私も恥ずかしながらあまり知らなかった部分ありますが、その辺の啓発活動はどうでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今ご意見のございましたように、消防団員に大変なご苦勞をかけておりますので、その辺の特典等はどういう面のメリットがあるのかということについては、改めて団員各位からもまたご理解いただくという方向で進んでまいらなければならないと思いますが、地域によっては違うんですが、例えば私たちの地域、私は第3だ、例えば団員の皆さんには大変ご苦勞かけているということで年間各世帯が相当の後援会費を納めています。これについては、うちの集落等もそうですが、全く異議はないんです。金額も相当大きいんですが、大変ご苦勞かけていると、難儀をかけている、地元の我々のために頑張っていたら、何とか皆さんのご苦勞に、厚意に応えたいという、そういう意味の皆さんに対する感謝の気持ちを込めた物的な、あるいは精神的な面でも応援をしているということを団員各位にお伝えをして、団員各位からも頑張っていたら、これからは、今加藤議員さんおっしゃるように、いろんな時代様式が変わってまいっておりますので、そういう改めてのいわゆるかつての消防団ではない近代的な、そういう意味の横の連携とか、いろいろな意味の時代に即応した団員がなかなか成り手がなく、不足しておるという面をカバーするという新たな体制も整えていかなきゃならないんじゃないかというふうにご考えておりますので、今ご提案のあるようなこともこれからやっぱり団員確保なり、あるいは団員各位が活動しやすい、あるいは効果の上がるような体制を整えるということが必要だと考えております。

○議長（仙海直樹） 6番、加藤議員。

○6番（加藤修三） 町長の今の答弁、ぜひ実行していただき、やはり欠員をなくす、それと魅力のある消防団ということを目指して再度考慮していただきたいと考えます。

次に、国は男女共同参画2030を上げ、2020年までに女性が活躍できる環境を30%を目標にうたっていますが、クリアすることはできず、先送りになりましたが、女性消防団員の参加増とスキルアップで指導的地位を目指させる考えはないか、これについて伺いますが。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 女性団員の確保ということでございますが、先ほどご答弁申し上げましたように、現在は3人というところでございます。これは本当に画期的な一つの事実として捉えながら喜んでいただいておりますが、これをいかに女性の皆さんからもご理解いただいて、団員として加入していただけるかということに対する啓蒙活動もしなければならぬと思っておりますし、併せて消防団の組織の中における女性の受入れ態勢というものをやっぱりしっかりと役割分担をしながらお願いをするということが私は大事じゃないかと思うんです。そういう面の、これから男性団員だけの確保は難しい、女性の皆さんの団員のお力を借りなければならぬというのが現実だと思うわけでございますので、その辺はやみくもにただ入ってくれと言うんじゃなくて、女性団員として、消防団員としての果たす役割、分野等についてもしっかりと明確に組織的に位置づけをしながら加入をお願いするということがないと、今までのような消防団というものを総体的な、総合的なひっくるめた活動となるとなかなか難しいと思うんです。そういう点を団の皆さんからもご理解いただいて、

女性団員の皆さんから入りやすいような体制を確保してもらい、これは行政も関わることでございますので、その辺もしっかりとまたやっていきたいというふうに思っております。確かにこれから女性の活躍の時代ということでございますので、やっぱりこの辺も大きなポイントになるんじゃないかというふうに考えていますので、改めて幹部各位の皆さんとの意見交換をしながら、啓蒙活動を、お願いする活動を展開してまいりたいというふうに思っています。

○議長（仙海直樹） 6番、加藤議員。

○6番（加藤修三） 町長いわく今女性の果たす役割ということで、私なりにちょっと調べた内容ありますけども、女性消防団員のスキルアップと活動推進として、危険物の取扱い、消防、防災士資格取得で火災時の的確な後方支援や、特に小中学校にはハザードマップの理解、ほとんど理解されていないと思われる5段階の警戒レベルの理解の徹底や、マイタイムラインづくりや心臓マッサージなどの心肺蘇生技術指導、AEDの講習、また最近あったように、関川村の小学校で国土交通省の豪雨体験装置で豪雨の体験学習、身近で起きた例、例えば愛知県一宮市で紡績工場が全焼しました。その中で、中学生が殺虫剤に火をつけて火災放射器みたいにやったために、パレットのところにあった蜂の巣から1つの燃糸工場が全焼しているということで、それらの最近あった事例も含めての講習等をやはり女性指導員の方にやっていただき、事故のないように努めていただきたいと。また、各家庭においては災害時の知識としてハザードマップの理解、警戒レベルの徹底した説明と完璧な理解や、これから寒くなる中で火災の発生要因、例えば電源コネクターのほこり、トラッキング現象ですが、発生やタコ足配線によるコード発熱の発火による火災など、災害防止指導など女性目線で対応してもらうために、女性消防団員のスキルアップと指導的地位を目指させる考えはないか、これについてお聞きします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今加藤議員さんから事例として数々お挙げをいただいておりますが、まさにそういう具体的なことについて女性団員の皆さんから啓蒙活動をしてもらうということは大事だと思うんですが、あまり最初から数々挙げて、こういうことをあなた方をお願いしたいんだということになりますと、大変また精神的な、肉体的な負担がかかるということになれば、これは入ろうと思っても尻込みをされる可能性がございますから、私はやっぱりすみ分けをしていかなきゃならないと思うんです。今災害時のハザードマップの理解とか、消火栓の問題とか、いろいろなことをおっしゃっているんですが、確かにそうです。しかし、やっぱり今回の内閣発足に当たっても自助、共助、公助、そういうもののすみ分けをしっかりとやっていかなければならないということが強調されております。私はまさにそうだと思うんです。災害についても全て他に頼るんじゃなくて、議員さんがおっしゃるように、まず自ら自らの命、財産を守るという、その自助の努力をやっぱり理解してもらわなければならない。そのためには、今ご指摘のございますような災害ハザードマップ等も確かにおっしゃるとおりだと思います。例えば、私は勉強不足ですが、今出雲崎町においてもレッド

ゾーン、イエローゾーン、地域指定をしておりますが、集落の地域指定はある。色分けはしてある。しかし、そこに住む人たちは自分たちが今どういう、その中に該当するのかどうかということまで全部理解されているか私ちょっと疑問に思うんです。今おっしゃるように、そういう点からまず住民の皆さんが集落、全部町は終わっているんですが、ハザードマップを色分けで、はてな、俺の家はレッドゾーンに入っているのかな、イエローゾーンに入っているのかなというような疑問、そういう点をもっと明確にやっぱり各家庭において、例えば私の家について、あなたのところはレッドゾーンに入っていますよ、その点をしっかりとご理解いただいて、非常時には速やかに避難をしてくださいという認識等を深めると、これは必要なんです。だから、やっぱりこれから消防団の活動もすべからく団員の皆さんが責務を負うということにはなってはならない。基本的には住民各位がまず自分の命は自分で守るという自助、これをしっかりとやらしてもらわなければならない。それに対する行政はしっかりと先行しながらお願いをしておりますが、いかにお願いをしてもご理解いただけないこともございます。そういう意味でこれから徹底的にそういう面に対する住民各位のご理解をいただくというようなことで対処してまいりたい。いろいろご指摘いただきますことも町も十分理解しながら、やるべきことはやっていきたい。高橋議員から災害時におけるサイレンの問題、これもやります。確かに必要なんです。だから、皆さんからご提案いただいたものについていいものはどんどん取り入れていかなきゃならん。そして、住民の皆さんにご理解いただいて、しっかりと認識してもらわなきゃならん。分かりやすく。そういう意味でこれから災害等も起こり得る可能性は十分ございますので、行政あるいは消防団員も全力を挙げますが、住民各位からも改めて自助という問題に対する認識を深めてもらわなきゃならんと思っておりますので、徹底的に住民各位にご理解を求めてまいりたい。皆さんのご協力もいただきたいと思います。

○議長（仙海直樹） 6番、加藤議員。

○6番（加藤修三） 町長言われました。自分の身は自分で守る、自助という形になりますけども、その中でやはり知識がなければいけない。それにはやっぱり女性消防団員目線で、対応が柔らかいと僕は思うんです、女性のほうが。そういう中で、あなたたちこうだね、こうだねということで、警戒レベルというのはこういうもので、4いったら逃げなきゃ駄目だよというような形で、3であれば高齢者とかそういう人たちは逃げる準備してくださいとかいうことが分かりやすいようにする。あなたの集落は山があって、これ危ないんだよということをやっぱりしっかりと柔らかい口調で、女性らしい形で教えていただくと。例えば、女性の中で学びの場が増えるということで、漫才師の女性の人が防災士になっているんです。今2万人ぐらい防災士がいるらしいんですけども、女性の方も学びの場が増えて、自分の地位も結構上がってくるということで、しっかり楽しくやれるということですので、そういう形で消防団員の欠員、それと女性消防団員の割合の増加ということで、町の災害、これらについてやっぱり防げるものは防いでいく。そのためには基本を、まず僕の考えは小中学生からきちんとしていたほうが物すごくいいかなと思いますので、その辺を

十分考えてこの辺の欠員の問題も含めて対応していただくとを希望して、私の質問を終わります。ありがとうございました。

◇ 中野勝正議員

○議長（仙海直樹） 次に、3番、中野勝正議員。

○3番（中野勝正） 私のほうから質問させていただきます。

質問の項目、町としての出雲崎高等学校の応援や支援について。質問の要旨ですが、7月の全員協議会のときに私は町長の考えをお伺いし、私も同じ考えを持っている一人であります。その中で、地元と共に頑張っている姿を強くアピールし、町と出雲崎高等学校との包括連携協定の締結に向けて準備を進めていると7月の全員協議会のときに話されました。私は大変いいことだということで、9月の定例会までに協定を結んでいただきたいというようなお話をさせていただいたところ、町長は拙速はしたくないというようなことで言われましたので、その中に含めまして、1、包括連携協定の内容について、今現在どのようになっているか伺います。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今議員さんから県立出雲崎高校学校のさらなる充実と発展を図るためにはどうすべきかと、先回の全員協議会でも真摯なご意見を承っておりますので、私たちもそれをしっかりと受け止めて、高等学校と密接な連携を取りながら今進めてまいっております。この包括連携協定につきましては、10月下旬を目途に今内容を詰めております。その内容等につきましては、かつて申し上げましたが、目的は教育についてももちろん情報交換をする、あるいは小学校、中学校との連携、あるいは町民各位との交流、そして各種高等学校機関との連携、大学も含めて、連携活動促進を図っていくということが主たる内容でございますが、これらの内容につきましては、申し上げますように、10月下旬を目途に協定の調印をしたいというふうに考えていますので、その過程におきまして、当然議会の皆さんにもご説明申し上げて、ご理解いただいた中において調印をしたいというふうに考えておりますので、包括協定、これも大事ですが、この後中野議員さんのいろいろな各分野にわたってのご質問をいただいておりますが、この辺を基軸として学校との関係を深めていきたくと、高校の進展を図ってまいりたいというふうに考えています。

○議長（仙海直樹） 3番、中野議員。

○3番（中野勝正） ぜひ10月下旬に結んでいただけるように努力していただきたいし、またその過程において私どももしっかり勉強させていただきますので、よろしくお願ひしたいというふうに考えております。

2番に挙げました町として魅力ある高校にするための施策をどのように考えているかお聞きします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） この前ちょっと申し上げたトリトンプロジェクト、これを5年間実施するという予定で今進めておりますが、このプロジェクトは新潟大学生と出雲崎高校生のオンラインの交流、あるいは大学教育の高度な学びの体験とか、あるいは新聞、テレビ、SNSによりますところの出雲崎高校の情報発信、あるいは高校、地域住民、学生による交通車両点灯呼びかけ等々に対して協働のアクションを起こしていきたいというようなことで、私たち地元、町といたしましても、高校生のこれらの事業を通しながら大いに県立出雲崎高校の情報発信を図ってまいりたいというふうに考えておりますし、またいろいろな意味での高校生との交流ということで、未来の夢子ども体験講演会等々も高校生の皆さんから参加をいただいてやっていきたい。あるいはまた、東京藝大の皆さんと高校生の美術部員の皆さんとのコラボ、協働の作業、活動というものを考えていきたいというふうに思っていますので、あらゆる分野において町といたしましてもこの県立出雲崎高校の特色ある魅力を発揮するように、学校側としっかりと連携を保ちながらやっていきたいということで進めてまいりますので、またよろしくひとつお願いしたいと思います。

○議長（仙海直樹） 3番、中野議員。

○3番（中野勝正） 7月の全員協議会の際に町長は町の姿勢を強くアピールすることが大事であるというふうに述べられ、そのためには逆転の発想が必要と思うというふうに述べられておりますし、また町の対応としては今後の課題であると述べ、その中で特殊的な学校の存在は欠かせないということを述べられているし、その中で学級の1減は仕方なく認めるが、ほかの全日制や普通高校と違った特性ある高校としての価値観があるというふうに述べられております。これを契機に徹底して学校、地域、町民、行政が一団となって頑張っていかなければならないというふうに述べられているし、今その中でどのような政策を考えられているかということは今町長が述べられた内容だろうと思いますが、私はなかなかこれ難しいというふうに考える一人ではありますが、ただ難しいといってほったらかして駄目にしておくわけにいきません。これは出雲崎の生命線でありますので、ぜひとも頑張ってくださいかなければならないというふうに考えているわけでありまして、その中におきまして今高校というか、どのようになっているかということになるわけでありまして、実際、今現在町として支援を高校にやられているんでしょうか、その辺お聞きします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 支援のこともさることながら、これから新潟県においても少子化時代で学生数が減ることによって、さらなる統廃合という問題が必ずクローズアップされてくるということは、これは必至だと私は考えています。そうなりますと、県立出雲崎高校は1学級ということになりますと、その対象になり得る可能性もあるんですが、しかしそこにおいて単に学級数が多いとか少ないというんじゃなくて、統廃合の中において、いかに少人数であってもその高校の特性を生かした、地域に、県全体にいろいろ影響を及ぼす高校は存続させるという基本方針があるんです。今中野議員さんおっしゃるように、県立出雲崎高校はかつて文科省から障害のある児童の教育に対

する委嘱を受けて、3年間ですか、やったんです。やっぱりそういう意味で、少人数であり、なかなか厳しい状況の中であっても、ほかの高校にない特性を出すことによってこの厳しい状況を切り抜けられるという状況あるんです。私は徹底して、この県立出雲崎高校は全県下の中における対象なんです。今単位制高校5つある中で、応募数は出雲崎が一番多いんです。ということは、それだけの全県下を網羅した中における県立出雲崎高校の存在価値はあるということなんです。私は、そういう点に対して、校長にも申し上げている。徹底してほかの学校にない特性を生かした高校の存在価値を示してくれと。そのために対しては町はどんなことでも応援する。ただし、これは町があしなさい、こうしなさいじゃ駄目です。やっぱり学校側は教育の中において我々の意図をしっかりと酌み取っていただいて、子どもたちにも伝えていただいて、存在価値を示す特色ある活動をしてもらう。そのためにはまずは惜しみなく協力すると。こっちは金を出しますが、そんな問題じゃない、できるわけではないんです。そういう意味で我々は、さっき包括協定もございましたが、学校と密接な連携を持って、地元の高校という、かつては72年の歴史を刻んだ高校です。村立から始まって、かつては4学級募集もあったことがあるんです。本当に時代の変り目を私は痛切に感じておるんですが、そういう中における生き残りをかけるためにも、今中野議員さんも心配され、議員各位からも本当にご心配いただいているわけで、私も同感です。全力を挙げて、この県立出雲崎高校、1学級ではありながら県下に存在価値を示す、そういう内容を私はこれから進めるべきだと。そのことによって生き残りをかけられると私は考えています。そういう意味で、どんな支援をするかどうかということは、私たちはそういう点をしっかりと学校側と密接に連携を取りながら、学校から頑張っていただく、そのためにもし地元自治体に対する要請があればどんなことでも応えていくと、私はそういう覚悟です。そんな意味で校長ともよく、この前申し上げたように、校長、教頭来ましたから、今私が申し上げたとおりしっかりと伝えてある。そういう意味でやっていきたいと思っています。

○議長（仙海直樹） 3番、中野議員。

○3番（中野勝正） ありがとうございます。過去に、旧西越高校のとき、当町が何十年だか何かのときに100万円ぐらい町が寄贈というんですか、何かやったような私は記憶にあるんですけども、そういうのをやってもっと頑張っていたきたいという町の姿勢を見せたことがあると私は思うんですけども、この数年になるかどうか分かりませんが、そのようなことは町として要らなかったのか、それとも県のほうでそれはいいよと、県立だから、やらなくてもいいよというような見解なのか、その辺の価値観の違いはどうだったのでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） おっしゃるように、創立記念とかそういうときはこれは別途としまして、今でも町は応援していますが、そういう施設関係の充実、例えばグラウンドのバックネットの問題とか、いろいろな意味で町は相当金を出して応援したんです。でも、やっぱり今後段で議員さんがおっし

やるように、県立高校という立場からして、町からそういう面でのいろいろな支援というのはあまり好ましくないという話があったんです。そういう意味で、その後におけるそういう物質的な、あるいは施設整備とか、そういうものに対しては金を出しておらない。また、要望もないんです。そういう過程があったということは事実。だから、金や物で解決できるという今段階ではないんです。ただし、学校側がそういう教育、学校側の方針の中にそういう特性を生かした学習なりすると、そのための人的要員が県の限られた予算の中では厳しいと、何とか町からしてくれとなれば、私は県に申しあげても町は絶対的に支援したいと思っています。そういう気持ちでいます。基本的には今県立ですから、そういうお話をいただいたという過程がございますので、ご理解いただきながら、施設関係は高校だって近年も相当の投資をしているんです。だから、あまりその必要性はないと思うんですが、内容の充実と特性ある学校をつくり出すための人的要員に対するお金やそういう面で学校側と話をしながら、そんなことは町は惜しみなく協力したいと思うんです。そういうものは認めてもらわなきゃ駄目なんです。それぐらいの思いを持っています。

○議長（仙海直樹） 3番、中野議員。

○3番（中野勝正） 町長の言うのもそのとおりでと思うんです。その中で、私も勉強不足の関係がありますので、資料といたしまして、新教育の先駆者ということで、これ見ますと、読ませていただいた中でいうと、私が生まれるずっと前、町長が2歳か3歳の時分じゃないかと思いますが、昭和8年から昭和12年、この人は布川さんという方なんですけども、亡くなったのが昭和15年だそうなんですけども、その中で心耕学園という中で、物すごく新潟県でもトップクラスという中で、また私立の大学、旧玉川学園、今玉川大学というふうになっているんでしょうか、その大学の今のつくった方から、並びにその関係者が当西越高校に来て、この心耕学園の精神というものはどのようになっているんだかというようなことを勉強に来られたということを書いているし、また西越という、こういう雑誌なんですけども、私の手元には40年と50周年のがあるんですけども、この中でも町長の若かりし頃の写真、町長の写真が載っていられて、その中で町長が祝辞を述べられています。その祝辞の中では、ここは絶対なくしちゃいけない、町を挙げて、村を挙げて応援しなきゃ駄目だという中で得々と述べられたのがありまして、その当時から町長燃えているなというような感じを受けたわけでありまして、この数年来たときにおいて、もうずっと話がなかったですね。私も勉強不足なんですけども、流れといたしましては、新聞報道しか知らなかったんですけども、平成27年から黙々とこうなりまして、今年の4月からは1学級減になって始まったという中で、1学級は35人だというふうに聞いているんですが、その中で当出雲崎の生徒はどのように上がっているかということですが、出雲崎高校に出雲崎中学から行っているの全体では7名だそうです。その中で今年は2名、2年生が3名、3年生が2名というふうにお聞きしております。その中で、出雲崎高校自体は出雲崎の生徒だけということはありません。その中でどのような支援策を打ち出すかによって、出雲崎外の方も物すごく私は関心を持っていると思うんです。その関心をどのよう

にするかにおいて勝負が決まるというふうには私は思うもので、しっかり支援策を行政以下、私たち議員と一緒に頑張ってまた頑張っ、どうしたら一番いいかというようなことを見極めていただきたいというふうに思っております。

その中で3番目は、町として出雲崎高校への進学率を向上する支援策はあるかどうかお聞きします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今議員さんがおっしゃったように、布川準一郎さんの心耕学園、源は深く、流れは遠しという、やっぱりかつての教育村としての存在価値や伝統があるわけです。それを何としても源は深く、流れは遠し、やっぱり流れは遠し、脈々とかつての先人が築いたそういう一つの伝統を町は守らなきゃ駄目だということの私は意義を感じながら、皆さんからもご努力いただいているということでございます。そういう中において、今お話がございましたように、新潟県立出雲崎高校の教育、単位制の学校というものはやっぱり普通高校とは、あるいはまた実業高校とは違いますので、出雲崎の皆さんにご理解いただく、それは理解いただいて、協力もいただいておりますが、これは出雲崎高校の特性、特色ある学校というものを伸ばすためには、普通高校、実業高校ではない存在価値を示すと。だから、結果的には、大体1学級減ったことによって応募者は大分オーバーしたんです。というのは、そういう普通高校なり実業高校でないところでそれぞれ自分の学びの意識を何とか生かしたいという、その特色ある学校なんです。そういう意味をやっぱり私は伸ばしていかなきゃならんというふうに思っているんです。大学進学するんだったら、これはまた別ですよ。別の目的を選びますが、えてしてやっぱりすべからず100%自分の意思どおりにいかないことがあるわけでございますので、そのものを自分の置かれている環境から学びの心を持ち、ひとつ特色ある学校で学びたいというものを、その学校の存在価値をしっかりと示していくと、これを各全県下に示して、全県下から入学、進学してもらおうというふうなことが私は大事じゃないかという意味で改めて申し上げますが、町としてこれをどうする、こうするじゃなくて、学校から実際の効果というものをそこに学び、そこで卒業した生徒が社会に出てどういう活躍をしているかということをしかりと伝えることによって存在価値が一段と光を増すと私は思うんです。そういう意味の高校にやっぱりやってもらいたいということで、町は応援したいということをお申し上げていますので、物的な支援、青少年育成会議は生徒会に3万円支給していますが、そんなことで私は収まるものじゃないと思うんです。そういう意味で徹底して私は歴史ある心耕学園のいわゆる伝統、脈々と流れをくんでいる出雲崎高校の存在をしっかりとやっぱり明確にしながら、さらに存続を図っていかなきゃならんというふうに思っています。

○議長（仙海直樹） 3番、中野議員。

○3番（中野勝正） その中で、私も町長が言っているの全部、100%、200%ぐらい同じ考えなんです。ですけども、私と町長としゃべっているだけじゃなくて、私は後ろに傍聴の方もいられる。こ

れを町の皆さんからしっかり認識していただきたいということでこれをしゃべらせていただいているわけですが、その中で出雲崎中学校を今年卒業された方は32名の中で、こうして10年後、今の小学校1年生が高校に入学するとなると、今の時点でいった場合は、小学校1年生は24名なんです。そうすると、それを今度は高等学校、今全県、さっき言われたように、どこでも子ども頑張れば行かれますので、10校以上選択があるんです。そうすると、出雲崎高校に行かないで違うところに行きたいと。私はここに行きたい。そうすると、おのずと生徒数が、枠が少なくなって、そうしたときに、今1学級減をどうのこうのではなく、さっき町長が言われたように、存続の危機も今やらなければ起きる可能性があるんです。そのために今しっかり支援を打ち出してやるにはどうしたらいいかということなんですけども、私はやはり交流が大事だと思うんです。小学校、中学校、今教育長の計らい中で交流をやっていられると思いますが、中学校と高校の交流、生徒の交流、また先生方の交流、これも非常に大事だし、また町のトップ、町長が高等学校行って、県立高校ではあるけれども、私ども出雲崎はこの高校はただ県立というふうに認識していないんだよと、地域の宝として認識しているんだよというようなことを町長からもお話ししていただくような意見交換みたいなのをやると、ああ、出雲崎はほかの町村に比べて物すごく違うなということを各父兄や町外の父兄の方にもアピールできるのではないかと私は思うんです。そんな中で、何が早くできるかどうかというのはしっかり検討していただきながら対応していただきたいというふうに考えております。

4番目ですけども、町として生徒及び教職員への支援策はあるか、これについてお伺いします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 先ほどから申し上げますように、施設整備とかそういうものについては、これは県のほうでしっかりとやっているわけでございますので、先ほど来から申し上げておりますように、トリトンプロジェクト、これは今お話がございましたように、まち、生活、そして交通、この頭文字を取ったのがトリトンプロジェクトなんです。私は、やっぱりそういう日常生活の中における住民の皆さんとか、いろいろな意味の生活の中における県立出雲崎高校の溶け込み、交わりをしっかりとしていかなければならんと。これは物資的なものとか、そういうものじゃないです。必然的に子ども数は少なくなってくるんです。そうなってくれば子どもさんたちの選択肢というのがあるわけです。その選択肢をしゃにむに高校に向けるというわけにはいかない。やっぱりそういうものにも自然活動の中でそれぞれの生徒の持てる能力、その中において単に進学じゃなくて、そういう自分の生活を、実態を把握をしていただきながら、県立出雲崎高校で学ぶことが将来社会的にどれだけのプラス価値があるのかということもしっかりと伝えなければならぬ。ただ物をやったり、金をやったりじゃ駄目です。そんなことでできるわけがない。私は、内容の、内面の充実を図るためには、これから今トリトンプロジェクト、こういう問題があるんです。あるいは生活なり、あるいはそういう町、あるいはいろいろな今重要な喫緊の課題である、そういうものを身近な問題と捉えながら、しっかりと対応しながら、住民各位からも理解いただく、そういうことによって、ああ、

これは出雲崎高校というのはほかの学校とはちょっと違った特色ある学校だと、よし、それじゃ子どもをそこに学ばせてやりたい、進学させたいということになると思うんです。私は、支援策というのは、魅力ある支援策、内面的なものをしっかりと発信をするということが大事です。ただ金や物じゃないです。そんなものでは絶対駄目だ。今そういう時代じゃないです。高校の存在価値というのを示さなきゃならない。内容です。内容で勝負だ。そのためにもし必要になれば町は限りない応援をするということを申し上げている。それ以外ないんです。そのためには、最近校長や教頭来ましたが、私は高校行ってないから、そういう意味でおっしゃるとおり、私もやっぱり率先して動きながら子どもたちとの対話も必要になっていくのかなと思っています。そういう意味で皆さんとしっかりとご指導いただいてやっていきたいと思っています。

○議長（仙海直樹） 3番、中野議員。

○3番（中野勝正） ぜひこの問題を町を挙げて頑張ってくださいと思います。

終わります。

○議長（仙海直樹） この際、しばらく休憩をいたします。議場の時計で10時40分から再開をいたしますので、お集まりをお願いいたします。

（午前10時29分）

○議長（仙海直樹） それでは、休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前10時40分）

◇ 中川正弘 議員

○議長（仙海直樹） 日程第1、一般質問を続けます。

次に、2番、中川正弘議員。

○2番（中川正弘） それでは、一般質問を続けさせていただきます。

いろいろな中で出雲崎町の発展あるいは観光というものをこれから見据えた中で、私は北前船との関わりの中で町の発展のきっかけをつかみたい、つかめるのではないかというふうに思っております。まず、現状をお聞かせ願いたいのですが、羽黒神社にある船絵馬、あるいは天領の里時代館にある敦賀屋、熊木屋等の古文書、船模型、鑑札札あるいは船仏壇、いかりなどのほか、どの程度のもが史料として町に保管されているのかというのは、これからはこれが大きな競争になってくるのではないかなというふうに思います。停泊地である佐渡あるいは寺泊等々とどれだけのものの価値があるものがあるのかということになってくると思いますので、どの程度のもが保存、保管されているのか、お願いいたします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 中川議員さんのご質問にお答えしますが、北前船関連の史料につきましては、

能登屋文書、あるいはまた敦賀屋文書、熊木屋文書という当時の廻船問屋関連の史料は多数中央公民館の郷土資料室文書保管スペースで保管、管理されておりますが、これらの文献は町史の海運資料編さんの際に整理されまして、保存状態は非常によく保存されておるといふところがございます。その他、天領の里におきましては、現在展示されております船たんすあるいは船仏壇あるいは船の模型もありますし、北前船を象徴する動産史料もありますし、伊万里大皿とか、大皿笏谷石、北前船交易の様子を、船の交易の様子を示す史料もあり、これらは良好な状態で保存、管理されています。また、町の指定文化財となっております船絵馬につきましては、羽黒神社、光照寺において適切に保管されておるといふことであります。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 数多々あるきつと史料が保管されているのだと思いますが、あるときやはりそれは系列的に、一元的に時代を追ったり、あるいは物事を追ったりしながらきちんと整理するべきときが来るのかなというふうに思います。また、整備したものをどのように展示するのか。町の資料館にあります、あるいはここにありませんで、どこかやっぱり1か所そういうものを展示する場所が必要になってくるんじゃないかなというふうに思うんですが、ただその中で一番今危惧しているのが船歌もそうなんです。船歌がもう歌えなくなってくる。歌わなくなってくる。今CDが残っているぐらいで、じゃこれ誰が歌えるのという、歌えなくなっていると思うんです。そういったものが、物だけじゃなくて、動産として残すものがなかなかなくなっているんじゃないかなというふうに思います。

そんな中で1つ町長にクイズじゃないですけど、お聞きしますけど、梵ぐいって知っていますか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 分かりました。ちょっと聞き取れないで、今お聞きしまして。実は今回の一般質問に備えまして、泊屋さんを全部見させてもらいました。そのとき舟つなぎ石もきちっと保存されています。しかし、かつて置かれた場所から移設をされていますが、きちっと保存されています。それを私は見させていただいて、おお、こういうものがあるんだと改めて感心をして、大事な一つの本当に生きた泊屋、かつての財をなした泊屋さんの廻船問屋としての価値あるものだなということを確認しました。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 北前船あるいは千石船といった大きな船は、岸に直接着けられたわけではなくて、沖に停泊して、そこからはしけでいろいろ物を運んだ。沖に泊まっているときに、その船をいかりだけではなくて、梵ぐいというくいで、そこにロープを巻いて船を係留した。今でも海の中にあるんです。昔高橋さんもきつと加藤さんも海泳ぐときにはあの梵ぐいまで泳ぐぞ、あの梵ぐいまで行くぞという形で梵ぐいというのが泳ぐときの目安になったんです。まだ俺は小さいから、そこまで泳がれないというふうな子どもから、あるいは大きくなってあそこまでぐらいもう泳げるだろ

うという目安になる梵ぐいというのが方々にあったんです、今町長がおっしゃるように。でも、これを今このままにしていたら、梵ぐいそのものが何なのか、どこにあったのか、何のためなのかきつと忘れ去られると思うんです。だから、今回北前船というものをきっかけとして、いろいろな今町も参加したり、いろいろなところに出ていたり、いろいろお金をかけています。町長も今回泊屋さん行ってみたということですが、素晴らしいと私は思います。ただ、歴史的にあるからということじゃなくて、きちんとした体系づけて押さえていかないと、今の梵ぐいあるいは船歌もそうなんです、結局最終的にはそういうもんがあったんで終わってしまうんです。だから、ぜひ今回北前船の史料の精査と、それからもう一つ系統的なそういうものをしていただいて、そして後でまた話をしようと思ったんですが、私は結局泊屋さんというものを今町がどのように歴史的な価値、遺産を考えておられるのか。泊屋さんというのは、今の警察の隣ですけど、そのほかにも熊木屋という今のところがございますが、あるいは敦賀屋、その中で今一番保存状態がいいのが泊屋かなというふうに思っていますけど、泊屋さんの、これ2番目になりますけど、あるいは3番目と重複しますが、今町長見てきたとおっしゃいましたけど、泊屋さんというのの船着場が残っていたり、蔵が残っていたりしますが、歴史的価値と遺産についての認識はどのように思っていますか。また、これを教育課等々、あるいは歴史談会というのもありますけども、調査したことがあるのかどうなのか、2番、3番重複しますが、それよろしくお願いします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 私も泊屋さんを全部中にも入れさせてもらいました。管理されている方がございますので、お願いして案内をしていただいたんですが、泊屋さんのかつての栄華を極めた庭、管理されていた方も整備をされて、ちょっと草も生えています。池の残痕もありますし、樹木も生えているわけですし、中に入れさせてもらったんですが、今泊屋さんの持ち主は年に二、三回帰省をされるらしいです。そして、お泊まりになっていくらしいんです。内部は、全部今様式に改造されています。ただ1つ、1階のほんの僅かなスペースですが、かつての面影を残す、ほんの僅かなスペースですが、残っていましたし、2階には海を望める手すりも昔の原形で残っていました。最も私は価値ある、今後検証するとするならば、バイパス沿いから入りますところの門があって入るところの石段と、そこに邸内に入る面影、事実がかつての歴史を残しているんです。私は、残念ながら佐野さんは帰省をされておられるようですし、できたら開放させていただきたいと思うのですが、ちょっと無理です。年に二、三回お帰りになるらしいんです。しっかりと生活様式もちゃんと整っています。だから、私は現地を見まして、教育長、皆さんと話しているんですが、バイパス沿いから入る石段があるんです。これを私はやっぱりご理解いただいて、かつての北前船の廻船問屋として栄華を極めた泊屋さんのかつての歴史が残っているんだというものを何か示したいということを考えて、管理人の皆さんにもお願いして、できたらそういう表示をしたいという気持ちを深めています。それは今後交渉の問題ですが、内部はちょっと入れません。佐野さんも生活されているので

す。蔵も外壁は全部囲ってありますし、中はほとんどないらしいんです。そんなことで、私は海岸バイパスから中に入るあれをちょっと何とかしたいなと思っていますし、熊木屋さんは跡地は広大な土地が草ぼうぼうになっていますし、全く今は面影もございませんし、あれをどうするというわけにはちょっといかないというふうに見てまいりました。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 今町長おっしゃるように裏から上がる門と、それから階段は、北前船の写真のときに、あるいは出雲崎を説明するときに必ず出てくる場所なんです。それを何とか私も残していただきたい。あるいは、何か見る人が、私は自分の家に来るお客様にマイクロバスに乗ったときには必ず裏へ行って、あそこに車を止めて説明申し上げます。ああ、そうなんだと、ここから荷物を上げたんだね、海の中から上げたんだねというふうな場所なんです。唯一残っているんです。ぜひ何とかしてほしいというのが1つなんです、それともう一つなんです。泊屋さん行かれたということですが、泊屋さんの庭に大きな石が何個もございましたか。あの石って何だか町長ご存じですか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 私はそういう庭に対するあまりないんですが、申し上げたように、かつての池の跡地とか、それはちゃんと形は残っていますし、樹木もありましたが、石はありましたか。私はちょっと分かりませんが、何かお聞かせいただきたい。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 北前船あるいは千石船という形で方々で貿易をしながら、北前船というのは基本的に行って来いではないんです。各港で安いものを仕入れて、次の港で高く売れるものを売ってくる。だから、運送屋でいうピストンだけではなくて、いろいろなものを仕入れしながら、高く売れるところで売っていったということらしいんです。だから、北前船1回動かすと、今の価格で大体1億もうかったんじゃないかというふうな資料もありますけども、そのときにあの石ですけども、実はあれ佐渡からも来ているんです。という話です。というのは、佐渡にこちらから品物を持って行って、向こうで高く売れて、売って帰ってくるときに、向こうで安いものがなければ持つてくることがない。空荷で走ると船の喫水線上がるんです。喫水線上がると船が安定しない。それで、わざわざ石を積んで帰ってきたというんです。これは私見たことないんですけど、聞いただけですけど。そのための石があそこにごろごろ置いてあるというんです、大きな石が。ただ、残念ながら佐渡の赤玉石は一つもありません。本当のただの石ですけども。今町長中入って見せていただいたといいますけども、泊屋さんというのは佐野さんというお宅、佐野さんという人が持っていらっしゃる。個人のお宅ですので、よくそこまで町長見に行ったなというふうには私は思うんですけども、なかなか個人のお宅ですので、その中のものを調べたり、あるいはいろいろなものをするのは大変だと思うんですけども、今佐野さんというのは秋田に住んでおられます。確かに年に二、三回来て

泊まったり、管理がどうなっているか、あるいは塀を直していったり、いろいろ手をかけてやっていらっしやいますけど、今佐野さんと出雲崎町との関係はどうなっているんでしょう。要するに佐野さんとの付き合いはあるんでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 残念ながら、私も今回あなたの一般質問もあるというので、改めてお願いをして中に入らせてもらって、管理人さんとお話をしたんですが、全く私自体は、佐野さんは今秋田のほうに在住されているようですが、交流はないというところでございますし、若干管理人の皆さんとちょっとお話をしていたんですが、できたら北前船、日本遺産に指定をされた町として、この跡地なりを何とかひとつ町としての何かシンボルにしたいということをお願いしたら、今は二、三回おいでになるそうですが、その方のお話ですよ、子どもさんたちはあまり興味がないし、この後どうするというようなあれはないのではないのでしょうかねというような、これは私語として聞いてもらいたいが、お話あったんです。だから、今、年に二、三回帰省をされているということになれば、今の方、佐野さんは今やっぱり先祖のあれをしっかりと、仏壇もありますし、中もきれいになっています。今の生活様式に全部変えてある。いつでもおいでになっても住まいできるようになっています。だから、今ここで私たちがどうするわけにはいかないと思っていますが、一つの最初のスタートラインとして、私はちょっと希望としてバイパスから入る門と階段を、由緒あるその場所を一般の皆さんからご理解いただくような表示をする何かをやりたいということをお願いしたんです。だから、これは佐野さんのご理解いただけるかどうか、これからまた交渉する余地があるかなと思っていますので、その辺はまた今回を契機にやってみたいと思っています。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 私は、個人的な希望ですけれども、ぜひ佐野さんと良好な関係をつくっていただいて、その門あるいは塀だけではなくて、建物そっくり保存して、そしてこれから北前船あるいは佐渡金銀山との、今度これがいろいろなものが脚光浴びたときに、ぜひそこが今度逆に出雲崎中の輝き、光る場所になるんじゃないかなというふうに思っています。そのときに裏のほうに、全部海岸は石積みになっているんです。佐野さんのところもそう。それから、その隣の警察のところもそう。みんなそうなんです。この前高橋議員が全員協議会の際に言いましたけれども、私はそういったものを勘案したときに、ちょっと町の意識が違うんじゃないかなというふうに思うんです。というのは、今回総務課からの発表では、警察の跡地も今度民有地になったのだから、今度払下げしたい、売りたいというふうな話ですけども、高橋さんも反対の意見でしたけど、私は大反対です。これから泊屋の跡地がどうなるか分かりませんが、そしてそれを生かすときに今の警察の跡地が大変な価値を生んでくると思うんです。だから私はそこを民間に払い下げるといえるのはいかがなものか、もう少し歴史的にあの辺のことを考えていただけないのかというふうに思っています。これは佐野さんという民とこっち側の官の話ですので、一概に話は進みませんが、ぜひ良好

な関係をつくっていただきたい。多分今佐野さんのお嬢さんというかな、おばあさんになっちゃうのかな、その人しか分かる人はいないと思うんです。その人がまだご存命のうちにぜひ話をいろいろ進めていただきたいというふうに思うんですけども。

今申し上げました、最後4番目になりますけども、佐渡金銀山と、これから遺産になったり、あるいは北前船で今いろいろなものが動いている、それが一つにリンクされたときに、あの場所が大変な価値を生み出すんだらうと思うんですけども、その中に一つ、羽黒町の神社の船絵馬というのが今有名でよく話題に上りますけども、町長、船絵馬って見たことございますでしょうか。住吉神社にもあるんです。どこの神社にも漁師さんが安全祈願のために船絵馬を奉納したり、あるいは額を奉納したりしてあるんです。寺泊は、船絵馬展示館というのがあるんです。出雲崎には残念ながら、各神社とかお宅にはあるけれども、それを一つにまとめているものがないんです。これから北前船でも、例えばいろいろなところ、山形の山居倉庫、いろいろなものがその土地、土地でこんなものがありますよ、出雲崎の北前船ではこんなものがあるですよというふうな、そういうポイント、ポイントの名物、あるいは遺跡といいますか、それがこれからは一般の方の注目を浴びるところだと思うんですが、町長、私は提案したいのは、佐野家と良好な関係をつくっていただいて、今の泊屋の跡地と警察の跡地、あれをリンクした中で、そこに船絵馬展示館、同じような、寺泊の二番煎じを造ってほしいとは言いませんけども、北前船の何かそういったものを展示、あるいはそこへ行けば北前船というのはこういうものだ、千石船というのはこういうものだというの分かるようなものが何とかできないのかな。でも、今町の計画ではそれを旧津又邸でやろうとしているんですよ。私は場所が違うなというふうに考えているんですけど、町長、いかがですか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） この後また高橋議員さんから警察跡地の問題等にご質問いただいていますし、たまたま中川議員さんからご質問をいただいております。しかし、どうでしょうか、皆さん。世界遺産に指定されても、かつての遺産が手を加えて人工的に変えられたら指定を取り消されるんです。あなた方警察の跡地のあれ見てどう思いますか。石垣は残っているんですが、塀になっているんですよ。コンクリで巻いてありますよ。あれがどういう北前船との関係あるんですか。あれは波をよけるためにやったのではないですか。そして、今あなたおっしゃるように、私大胆に言わせてもらおう。それは皆さんのご意見もある。泊屋さんと警察跡地と熊木屋さん全部隣接しています。あの土地をあなた方は本当に北前船のいろんな意味で拠点をつくると、できますか。可能性があるとするならば、泊屋さんにこれからの段階で、現実にあの石畳は残っているんです。あれは現実です。手を加えていない。そういう一角に対して重点的に投資をする。そうじゃないですか。できますか。警察跡地から熊木屋と含めてあの広大な土地にどういう投資をしますか。そこなんです。やればいいといったって、やっぱり重点的に、最も基本的にいかに理解されるか、拠点をつくるということです。何もかにも一手に広げてという、そんなことができますか。警察跡地のあの石畳は価値あるん

ですか。人工的にコンクリで巻いてあります。だから、あれが北前船とのどう関わりあるんですか。あれは波打ちをよけた塀ではないですか。全部あったんです。たまたま残っているだけ。ただし、泊屋さんのあれは本当に歴史を刻んでいる。そういうところを重点的にやらなければ、あの石畳全部残っているの全部残すんですか。どういう形で残すんですか。だから、これからは、それはお気持ちは分かるんです。ただし、町の財政、いろいろな面からしてあの広大な土地を全部まとめてどういう形で歴史的なあれをつくるんですか。可能性としては、あなたがおっしゃるように、佐野さんとの連携を取って、泊屋さん跡地を、あれだけでも広大な土地ですよ。大変ですよ、買うにしても。どういう対応を取りますか。可能性としてはそこです。重点的に投資していかなければならないと私は思います。皆さんがどういう素案にするか、皆さんのご意見あったらお聞きする。でも、現にあの波打ちのあれを価値あると思いますか、皆さん見て。私は見た限りではない。波打ちですよ。そして、コンクリで巻いてありますよ。どういう価値あるんですか。そういう意味で私はあなたの質問に対して答えたいことは、泊屋さんとの関係をこれから重視しながら重点的に泊屋さん跡地を北前船の拠点とするということは可能性としては効果もあると思います。厳しいと思いますが、私はやっぱり進めるのであれば、一つ一つやっていかなければ何もかもできるわけないでしょう。私はそう思います。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 町長の考え方は分かりました。泊屋というあの敷地が大変広大なものである。なぜ広大な敷地があるのか。それだけ豪商として栄華を誇った家であると。そしてまた、庭を見れば池があったり、大きな松が植えてあったり、昔の栄華を臆する、あるいは付度するように十分な今まだ地形が残っているというふうに思います。町長とこの問題についていろいろ意見する気はございませんけれども、ただ今の泊屋さんというものの価値をもう少し我々も、あるいは町も考えてもいいのではないかと。確かに裏の門とあの石段はすばらしいもの、あれは現存しています。昔のものが現存している。ただ、今ある庭を含めて、あの石を含めて、松を含めて、新しくなった門を含めて、塀を含めて、ああ、泊屋という廻船問屋はこれだけの敷地でこれだけのものところに住んでおられたんだというふうなものを外からでも昔の栄華を見るよすがになるというところだけは、これは私も譲れない。やっぱりそういうものがあったんだよということをこれから後世に伝えていく必要があると思います。

時間も時間ですので、次2つ目に行きます。妻入りの街並みについて町長にお話を伺います。出雲崎の町は妻入りの街並み、妻入りの街並みと言いますが、本当にすばらしい妻入りの街並みが4.2キロれんたんしている、これがすばらしい、町長はいつも言います。妻入りの街並みというと、元の街並みで街の中、ただ海岸のバイパスをどんどん、どんどん人が行ったり、あるいは車が行ったり行き来するんだけど、中になかなか入ってきていただけない。この妻入りの街並みを通る人たちに妻入りの街並みに何とかして入って見てもらいたいというふうなのが私の今回の質問の趣

旨なんです、それには私は海岸公民館の駐車場、あるいは妻入り会館の駐車場、あるいは天領の里から出てきた、石油記念館から出てきたところに造った駐車場等々を利用して、そこに何とかお客様を誘導できないかというふうに思っております。妻入りの街並みという大きな看板があれば、海岸を通ったお客さんが、あるいは一般の観光客があれ、妻入りの街並みって何だろう、妻入りの街並み、右側駐車場Pと書いてあれば、そこを右に曲がらないだろうか、妻入りの街並み、左側Pと書いてあれば、そこを曲がらないだろうかというふうに私は考えるんです。何とか取り組む工夫、仕掛けが必要じゃないかなと思うんですけども、町長、考えをお聞かせください。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 妻入りの街並みの動線をどういう形で作るかというご質問ですし、ご提案もあろうと思いますが、確かにそのとおりでございますし、そういう点につきましても、駐車場関係につきましてもある程度石井町、羽黒町あるいは井鼻等々にもございますし、観光マップも一応設置してあります。設置はしてありますが、まだまだ不十分なところもあろうかと思っておりますので、その点はまた改善をしていかなければならないというふうには思っておりますが、これから私たちは妻入りの街並みにあぐらをかいているわけではございません。しかし、いかに妻入りの街並みに大勢の皆さんから歩いてもらうための魅力をどうつくり出すか。看板はただ乗り入れだけではないと思います。特に歩くということになりますと、やはりある程度一定の道路の動線としての自動車の乗り入れ等は必要だと思うんですが、ある程度、例えば工場を歩いて街並みに入るという方式は、車で通るということになればただ車で通過してしまいますから、できるだけやっぱり歩いてもらうということを重点に考えますと、単に駐車場とか看板だけでは、これも必要ですよ、それだけじゃない。やはりいかに、福島の大内宿もそうです。白川郷もそうです。単にかやぶきの妻入りじゃないんです。それだけ見たら全くどこにもあるんです。でも、そうではない。そういうれんたんをしたかやぶきの中に人々が入って探索をしながら食べたり、体験をしたり、また目で見たり、いろいろな面で学ぶところ、興味を持つところがたくさんあるんです。そこに人が入るんです。ただ看板や道路ではないんです。私はそれを言うんです。妻入りを生かすためには、これから徹底的に私は、お願いしているように、妻入りのあの町の中に食べたり、あるいは今私たちもいろいろご指摘がございますが、北前船の展示なり、いろいろやるんですが、やっぱり止まって見て、そして町民と交流したり、そういうものが出てこない以上は、駐車場看板だけでは妻入りは絶対にいけないと私は思っている。何としても妻入りを生かすためには、町を重点的に、あの町の中に皆さんが入っていただけるような食べ物屋とか、あるいは町も進めますが、そういうものに足をとどめていただけるようなものを、動線をつくっていかなければ絶対駄目です。私は徹底してそれやりたい。そういうこと考えているんです。中川さんおっしゃる看板も改善しなければならぬし、必要だと思いますから、それはやりますが、それだけではお客は入ってきません。何としても妻入りを生かすためには、皆さんが入って、歩きながら食べたり、見たり、体験したり、そういうものが必要だ。

そういうものをいかに拠点をつくるかということをお私は何としてもやっけていきたくてという気持ちはあるんです。そういう意味で妻入りのこれから大きな課題は、その課題を解決しない以上は永久に論議平行線ということで、何としても私はそれをやっけてみたいと思います。お願いしたいと思いません。そういう形の中で妻入りを生かさなければ人は入ってきません。そういう形の中で私は進めるべきじゃないか。中川さんがおっしゃる看板も道路もそれは必要ですから、必要なところは整備していかなければならない。この後また距離の問題とか、おっしゃるとおりですから、改善すべきなのは十分改善をして、そういうものも大事な要素です。ですが、基本は、本当に重要なことは何としてもそういうものをつくりたいという、私はこれから徹底的に皆さんと相談しながらやっけていきたくて思っていますので、看板も整備しまして、道路の関係もやっけていかなければならないと思うんですが、そういう拠点をどうしてもつくっていきたくてという気持ちはあります。そのようなことで皆さんからもいろいろご指導はいただきたくて思っています。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） 町長も私も先走って2番、3番、4番全部一緒になりましたけども、今町長がおっしゃっているそういった土産物や、あるいは足を止めるようなものが欲しいんだと。町長今言い出したことではなくて、昔からそう言っていますよね。尼瀬を妻入りの街並みの重点地区にしたいんだ。そのときにもここにお土産物屋とか何か食べるものとか、そういったものをつくりたいんだというふうにおっしゃっておいりましたけども、なかなか現実味を帯びてこないというのが今の状況ですけども、それができれば最高だと私も思っています。そういったものができて、拠点、拠点でここで腰を下ろしながら街の中を歩いてもらう。ただ、町長、私街にいますと、お客様に聞かれるんです。すみません、妻入りの街並み見に来たんですけど、妻入りの街並みってどこですかと聞かれます。拠点で100mでも200mでもきちんとなっているところないんですよ、街並みは。だから、この出雲崎の海岸全部妻入りの街並みですよと言うんです。あるいは、良寛記念館の夕日の丘公園一番上から見たときに一番妻入りをはっきり分かるんです。屋根がれんたんして、上から見たときに。でも、歩いているとなかなかそれが分からないんで、妻入りの街並みはどこですかと聞かれますけども、またどこかで話元に戻さなきゃいけないんですけども、そういったところに、町長が言われるように、そういったものができれば私は最高だと思います。でも、今建設課のほうでもいろいろ街の修景したときに、妻入りの街並み風にしたときには補助も出していますし、そういうお宅も増えてまいりました。そういったところを見てもう少し海岸から中へ入る道路、最初は羽黒町の道路が今年の春先ではどうもできそうだったんですけども、今話聞けばなかなか冬期はうまくないみたいですけども、だから今この話はなしにしますけども、あるいは鳴滝町、羽黒町と鳴滝町の間、そこも大分広い土地があって、そして海岸のところには駐車場も置いてある。そこから中に入ってきていただけないかなというふうにも思うんです。だから、今も質問として書き出してありますけども、町長の答弁要りませんけども、こういった中に入る道路がなければ人は

入ってこないんじゃないか。結局今年の夏コロナだ、コロナだと言いますが、お盆の頃なんてすごい車でした。海岸道路渡れません。その人たちが止まる場所という、フィッシングパークか天領の里なんです。みんなあと素通りなんです。そして、石地の駐車場とかみんな海水浴場がクローズされているので、止まる場所がない、トイレがないとみんなあたふた、あたふたしていたようです。せっかくこれだけ金を使いたい、遊びたいという人が来ているのに、左手、妻入りの街並み出雲崎あるいは出雲崎の井鼻あるいは尼瀬に妻入りの街並み出雲崎という看板があれば、私は何人かの人は街の中に入ってくれるんじゃないかというふうに思います。

町長は決してあぐらをかいているわけじゃない、そういったことも含めてやろうというふうにおっしゃっていますので、次に渡すために私もまともに入りますけども、町長、やっぱり人というのはなかなか視覚に訴えて、ああ、きれいだな、あれ、これ何だろう、それから動くんです。だから、尼瀬の端に、井鼻の端に妻入りの街並みという看板が一つもないんです、大きな看板が。天領の里と書いてあります。妻入りの街並み、私はでも町長こう言うかと思ったんです。中川、そんなこといったって、車がどんどん、どんどん入ってきたら交通事故で危ないだろうというふうな拒否のされ方をするのかと思っていましたけども、どうでしょう。これだけ、私は鶏が先か卵が先かじゃないと思うんです。それだけ人が歩けば、結局誰かが土産物屋やります。夏人がどんどん、どんどん入ってくれば、かき氷誰かが売ります。どんどん、どんどん人が入ってきて、腰を下ろすところが欲しかったら、冷たいお茶どうですかと誰かが言います。やっぱり誰も来ないところで商売できないんです。野中の一軒家で商売はできないんです。やっぱり人が来てくれる、人が歩いてくれる、それが私は大事だと思う。

町長に、全部一遍にやりますけど、お願いがあります。町の柏崎寄り、寺泊寄りに妻入りの街並み出雲崎という大きな看板を作っていただけませんか。そして、駐車場を、例えば今太古七さんから入れます。太古七さんから入るところに左、妻入りの街並み、右、駐車場、商工会館、あるいは港郵便局、左、妻入りの街並み、左、駐車場、海岸公民館というふうな看板を作れば、私は若干でも人が入ってくるんじゃないかなというふうに思っています。また、そうやってやれば私は何かまた次の動きが出てくるんじゃないかなというふうに思いますが、町長、考えを聞かせてください。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今ご指摘いただきました点は十分理解して、どうでしょうか、今妻入りの街並みを、出雲崎ちょうど海岸線になっていますよね。名称をしっかりと変えまして、妻入り街道なり、しっかりと妻入りの道路なんだというものの位置づけをちょっとやってみる。妻入り街道というのは今私が申し上げているんですが、これはやっぱり議会の皆さんのご承認をいただく、議決あるんでしょう。

〔「そうですね」の声あり〕

○町長（小林則幸） 議決あるの。

〔「そのほうがいいのではないですか」の声あり〕

○町長（小林則幸） 名前はともあれ、妻入りを象徴するような道路名をしっかりとつけて、やっぱり本当に妻入りの街並みに関する道路なんだというしっかり名称を変えて、そしてまた看板等も整備するというので、名前等については妻入り街道にするのか、何にするか、また皆さんと相談しながら、3月議会あたりに提案して、おっしゃるとおりやってみたいと思います。大事なことだと思いますので。いろいろご提案あるんですが、しっかりとまた検証しながら、本当に何もかにも一気に解決するというわけにまいりませんので、着実に一つ一つ解決するというような方法で皆さんとひとつまた協議させてもらいたいと思いますので、よろしくひとつ。街道の名前は変えるべく、皆さんにもご相談しながら提案したいと思いますので、またよろしくをお願いします。

○議長（仙海直樹） 2番、中川議員。

○2番（中川正弘） それでは、最後にしますけども、町長、何かをやろうと動けば、結局最終的に何か残ると思うんです。今回町長本当にありがたいことにやろうという気持ちでいただけますので、こうやって妻入りの街並みを海岸バイパスを走っている人から妻入りの街並みという看板が見えれば、知らない人も、あれ、妻入りの街並みって何なんだろう、キツネの嫁入りって聞いたことあるけど、妻入りって何なんだというふうな話が出てくれば、誰かしらが入ってくる。何人かが入ってくれば、浜焼きが1本余計売れたら、そこでお茶を出してくれるかもしれない。そうやって回り回っていって、ぜひそうやって今後とも、町の海岸のバイパスはすばらしくなりました。駐車場もいっぱいあります。ただ、中に何とか入る方法をこれからも考えていただきたいと思います。お願いして終わります。

◇ 小 黒 博 泰 議 員

○議長（仙海直樹） それでは次に、1番、小黒博泰議員。

○1番（小黒博泰） 質問の項目なんですけども、議題のとおり黒崎水源改修について、川西にある水源ですけれども、それについて質問させていただきます。これは、平成29年の9月の一般質問でも私質問させていただきました。そのとき黒崎水源は50年経過して、町内で一番古い水源であり、いろいろな町民からの意見があるということで町長答弁いただきました。隣に用地も確保してあるので、更新時期や水質の調査などを検討しながら、この先のことを検討するという答弁でした。その中において次の質問をしたいと思います。

1つ、施設更新のために、あれから3年たっていますけれども、現在までに水質の調査、更新のための準備はどの程度進んでいるのか伺います。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 小黒さんから機会あるごとにこの問題提起をいただいておりますので、担当のほうでもしっかりといかに対応するか検討してまいっておるところでございますが、ちょっと状況

をお伝えをしたいと思っています。

駅前地区に配水している黒崎水源、この水質改善の準備状況でございますが、昨年度に水質改善の検討業務を実施しておりますが、現在の黒崎水源をそのまま使用することは硬度を低下させる必要があります。硬度低下の設備には莫大な初期投資、大体1億5,000万円程度かかるのではないかとと言われておるんですが、またランニングコストも相当かかるということがございますので、かねがね申し上げておりますように、他の浄水場の水を運用して、黒崎水源から配水をしている駅前地区の皆さんの硬度を下げるができるように検討いたしました。幾つか検討した中で、現実的に経済性の方策としましては、大釜谷の浄水場から途中の配水の数を少なくして、黒崎浄水場まで送水をして、黒崎水源と混合して硬度を下げて貯水池に送るというものですが、水を混合する混合槽は、黒崎浄水場の隣の空き地がございますので、町の土地がございますので、そこに建設をしまして、既存の揚水ポンプを使いながら出雲崎高校の上の配水池に送水いたします。これによって、計算上ではありますが、カルシウム、マグネシウム、いわゆる水の硬度は他の浄水場とほぼ同じリッター当たり60ミリグラムになるということになってはいますが、硬度の一番高い新川西水源は、夏のプール準備、漏水事故等の随時水源等のバックアップ水源として残しておりますが、ふだんは配水はしておらないというところがございます。実施につきましては、国庫補助金や起債を使えるように今考えながら、令和3年度に細部の調査をしまして、実施設計を行いまして、2か年程度で完成をしたいというふうに考えています。また、今年度は住吉町地区に配水しております松本の浄水場の水を駅前地区に配水できるように今工事中であります。

以上です。

○議長（仙海直樹） 1番、小黒議員。

○1番（小黒博泰） ありがとうございます。それなりに調査等進んで、更新準備ですか、今町長言ったように、あそこだけで更新すると1億5,000万円お金がかかるという中で、大釜谷の水源から黒崎水源と混合してやりたいという今答弁でしたけれども、果たしてそれが硬度が高い黒崎水源の水と混ぜてまで黒崎水源を残す必要があるのか。ちょうど水質でありましたけど、これ町の、令和2年度の水質検査計画でありますけど、これは5月の広報いずもぎきにも水質検査全項目異常なくということを出ていました。これは、ほんの赤坂山というか、西越地区になるんですか、だけの基準値のデータが載っています。町のホームページのほうにはほかの浄水場の水質検査の結果は載っていますけど、要は原水、地下水をくみ上げているところの水質というのは私が調べる限りだと公表はされていませんよね。私は蛇口をひねって出てきた水は、言っちゃ悪いですけど、水質検査クリアするのは当然だと思うんです。もし何か変なのが出てくれば駄目なので。ただ、その前にやっぱりくみ上げている原水が一番大事だと思うんです。そうすると、黒崎水源、町の計画でいくと原水検査は年1回ですよ、7月と8月。町の全水源16か所多分あると思うんですけど、井戸が。その元の水を調査するのがたった年1回で、今回黒崎だけにしますけど、黒崎水源はやっぱり町長

言うように硬度が高いということで、鉄分、マンガン類が高いわけです。それを、前から言うように、今現状ほかの水源はみんなろ過装置でもって鉄分、マンガンを除去して各家庭に給水していますが、黒崎水源からくみ上げた水だけは、町内でも一番鉄分、マンガンが多いと思う水源の中で、ろ過もしないで、塩素だけでもって出ているわけじゃないですか。ですので、その中でもって黒崎水源を残す価値というか、水質的に大釜谷の水等々でもって足りているのであれば、この先更新とかその辺で設備のお金をかけてする必要があるのかという、私はそういう考えでいるんですけども。だから、今町長答弁言ったように、あそこでもってやっぱり施設更新をするための準備をこの先も進めていくということによろしいでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） そのとおりですし、硬度関係は申し上げておりますが、黒崎水源はその原水のところで104ミリグラムあるんです。他は54ミリグラムあるんですが、新川西水源は147もございませうから、一般の家庭には配水しないということ、これは硬度が非常に高いわけですので、その辺は他は45とか40とか54ですので、これを中和して同じレベルに下げたいということで計画を立てているわけですし、黒崎の水源は、あれは施設を残さなければならないかな。

[何事か声あり]

○町長（小林則幸） それと、今小黒議員さんの黒崎水源はなぜ必要なのかということですね。その質問でいいですか。

○1番（小黒博泰） いいです。

○町長（小林則幸） その質問に答えろと。

○1番（小黒博泰） はい、教えてください。

○町長（小林則幸） 2番目の質問でいいですね。

○1番（小黒博泰） はい。

○町長（小林則幸） そうすると、駅前地区に送水予定の大釜谷浄水場の適正配水量では、現在駅前地区の要求量に不足する状況であります。黒崎水源を当面使う必要があるということです。駅前地区の硬度対策工事が完成した時点で、水需要の状況を見ながら松本水源、小木浄水場の配水範囲を駅前地区の一部に広げることができ、黒崎水源を配水しなくて済むのであれば、新川西水源と同様に配水をしないということも考えられる。しかし、急な漏水事故とか火災による水需要、あるいは施設メンテナンスによる減水などに対応するためには配水量に余裕を持つ必要があるということでございますので、国税庁の耐用年数の取扱い通達からいたしますと、深井戸は41年とされておりまして、黒崎水源は昭和38年に供用開始しておりますので、57年経過しておると。多くの水道事業者は、実際には不具合が出始めた段階で井戸の更新をしているということのようでありまして。硬度対策工事が完成し、当面は黒崎水源を使用することになりますが、水需要の状況を見て使用せずに需要に対応できることになれば、配水は休止したいというふうに考えています。先ほども答弁いたし

ましたように、当面は黒崎水源の使用となりますが、水需要の状況によっては使用しないと、配水を休止するというございます。黒崎水源については、新川西水源と同様に不要となっても余裕水源として維持していく必要があるということございます。井戸の寿命が来ましたので、その際の状況を考えながら、井戸の掘り直しというようなことも考えていかなければならないんじゃないかというふうにございます。

○議長（仙海直樹） 1番、小黒議員。

○1番（小黒博泰） どうしても、今の答弁でいくと黒崎水源は確実に必要というか、当面の間必要だという、それは分かるんですけど、ほかで大釜谷とか新しい井戸の黒崎や新川西水源より水質的にちょっといいところが出れば、できるだけそっちの水を回して、以前ちょっとほかのやつでたしか前課長、大分黒崎水源の水量を絞って、釜谷と混合して送っているという話は聞いたんですけど、その数字がちょっと6割か7割か分からないんですけど、そういう話も聞いた中で、黒崎水源を正直使わなくても、水量的にはこの町は多分ほかの水源の水で足りるのかなと私思うんです。

これ5月の広報にも出ていましたけども、出雲崎、これあれですけど、給水人口4,340人でもって、1日配水能力が2,780立米、1日最大でも2,280立米で、普通の日だと平均配水量が1,642立米なんで、そうすると配水能力的にはかなりの余裕が、ピーク時はちょっとあれですけども、500立米ぐらいですけど、ふだん平日何も無いようなときであればかなり、1,100ぐらいですか、の余裕があるんで、川西の水源の水を使わなくてもカバーできるのではないかと思います。

私ずっと議員になってから言っていますけど、本当に川西来てから、久田にいたときはいいんです。水源は赤坂山なんですけど、川西に来てから本当に水道の水質というか、お風呂に、浴槽にたればやっぱり独特な臭いするんです。カルキもあるし、浴槽の鏡も、もううちは10年たちますけど、その前からカルキがついて真っ白で全然見えない状態です。町とかほかに言えば終わった後にシャワーで流してくださいとか言いますが、流しただけじゃ同じだと思うんです、私は。やっぱり拭き取って乾燥させるとかしないと。そういう話はやっぱりてまり団地の町外から来た方からもそうですし、様々な方にそうやって言われたもので、鉄分とかその辺も多いと思うんです。それなりに地下水なので。そうすると、やっぱりそういうのが長年ではないですけど、給水管やそういう鉄の部分にたまって、給湯器とかの傷みも多分早くなりますし、鉄の管を使っていれば、そこからさびとかで漏水等々も出てくると思います。

今黒崎水源があそこに昔からずっと角にあって、隣も用地空いています。たしかあそこは新川西団地ですか、あそこを団地造成したときに、多分私の記憶だと一回あそこはどこかのハウスメーカーか何か買って、建て売りか何かでチラシか何か出ていたようなところをまた町が買い戻したのか、最初から売っていなかったのかちょっと分かりませんが、要はあのような、今度新しくこの先何年にそういう今の代わりの施設ができるか分かりませんが、やっぱり住宅地というか、新川西団地とかって造成した中にそういう施設でポンプだとか何かという、そういう騒音、そうい

うふうなものができれば、隣の方からやっぱりクレームではないですけど、出てくると思うんです。そういう中で、町長の言うようにもう50年もたっている古い、施設は古いですけど、水質がいいのであればそういうのは必要だと思うんですけど、施設も古くて、水質もやっぱりほかより硬度が高いということで、ほかよりよくない水源をこの先も残す必要性が本当にあるのかどうか、その辺は町長自身はどうお考えですか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 水を本当に検査をしていますし、それぞれ利用いただいている住民の皆さんのそういう意味の健康を害すると、そういうことは絶対あり得ないんですが、しかしやっぱり小黒さんがおっしゃっているように、硬度が高いということによって、風呂もそうですし、ポットもそうですし、いろいろな意味でこれは大変お困りだと思っておるわけでございます。そういう意味で、町もやっぱり軟水供給をしなければならんというので、方々に井戸を掘りながら良質な水を供給したいという考えでおるわけですが、なかなか思うようにいかない。掘っても、やっぱり硬度が高くて使えない井戸が出たり、いろいろ出ているわけですが、やっぱり基本的には、今小黒さんのおっしゃるように、今日の新聞ですか、柏崎も水需要が非常に減少して、水道料金を大幅アップするというような記事が出ておりますが、残念ながらやっぱり需要も若干落ちているわけでございますので、平常時のできる限り今小黒さんが困っておられる、住民の皆さんが困っておられるようなことを回避すべく最善を尽くすべきだと私は思っています。今だから申し上げますように、黒崎水源の水を一般の人に供給しなくとも、大体釜谷辺りの水を回して、それをポンプでくみ上げて配水できるような状況が限りなく可能性があるとするならば、そういう方向に持っていかなければならないと思いますし、できたらもう少し良質な水が、そこに配水できるような井戸が、場所が見つければ金がかかっても井戸を掘っていい水を供給すべきだと私は思います。金ではなくて。そういう意味で今、課長も考えておりますように、黒崎水源の水を限りなく、できるだけ使わないで軟水の大釜谷、あのような水を配水できるような状況が可能かどうか再検討して、できる限り住民の皆さんにご迷惑をかけないようにすべく努力してまいりたいと思いますので、しばらく時間を貸していただきたいと思います。

○議長（仙海直樹） 1番、小黒議員。

○1番（小黒博泰） その中で、私これ1つ提案なんですけど、ここまで言ってもこの先の水質でもって更新するか分かりませんが、現時点で新川西水源を今使っていない状態ではないですか。緊急時に備えて残してありますけども、あそこにはろ過装置ついているんですよ。今黒崎水源をこの先しばらく使いたいのであれば、あそこにあるろ過装置を黒崎水源に持ってこれないのか。であれば、そうした場合に黒崎水源のほうが水源あれば多少なりの水質改善にはなるのではないかと。

○議長（仙海直樹） この際、しばらく休憩します。

（午前11時48分）

○議長（仙海直樹） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前11時48分）

○議長（仙海直樹） 小黒議員、続けてください。

○1番（小黒博泰） どこまで質問したか分かりませんが、要は新川西水源のろ過装置がついていなければ黒崎に持ってきてくださいと。本当に、さっきも言っていますように、地下水なので、硬度高いのは分かると思うんです。鉄分とかもあって、やっぱり川西のときは洗濯物は白いやつが黄色くなるぐらいなので、私今家でTシャツ、シャツみたいなのはしようがないんで、あれですけど、ふだん仕事に使うTシャツは白いものにすると黄色くなって着れなくなるので、色つきのTシャツ買ってやっています。うちの家内もやっぱりそういう、何とか水どうにかならぬのかという中で、空いている施設のもので鉄分とかマンガンを少しでもやっぱり除去できればもっと水質的にはよくなるのではないかなという。ですので、新川西のろ過装置を黒崎に取りあえず持ってきて、少しでもいい水質で次の新しい施設に更新するまで何とかそれでカバーできないかという質問です。

○議長（仙海直樹） 建設課長。

○建設課長（小崎一博） ちょっと細かな内容でございますので、私のほうから説明させていただきます。

新川西水源、今ほど申しましたが、若干ですが、井戸を殺さないために配水はしております。ですが、将来的には新川西水源は配水しないということでございますので、今のご提案、新川西のろ過装置を黒崎に持ってきて運用するというご提案でございますが、その前に大釜谷水源系の水を黒崎系、黒崎水源の付近に持ってまいります。数字的な話だけでございますが、大釜谷水源の水を約230トン、1日当たりでございますが、これと黒崎水源を約60トン混合しますと、大体硬度1リッター当たり60ミリグラムに低下いたします。これを出雲崎高校の上の配水池に上げ、配水するというを行おうとしておりますので、今新川西のろ過装置を黒崎水源に持ってくるということはそれだけで多額の費用がかかりますし、将来的には小木系の水、今小木と川西の辺りで仕切っておりますけども、そこをやすらぎの里付近まで範囲を徐々に徐々に広げようという実験を工事が終わった段階でしようとしております。また、松本の配水池、神条といいますか、松本水源の水を、今現在は下西越方向に配水しておりますが、今現在工事しておりますとおり、松本集落側へ下ろす管路工事をしております。ですので、松本水源系の水も駅前地区へどんどん配水しようという計画でおります。ですので、黒崎水源をなるべく絞り、小木系の水、松本系の水で駅前地区をどんどん、どんどん賄っていく。そして、なるべく大釜谷系の水を多く配水する。ある程度完成したところで細かな蛇口からの水質調査、硬度がどれぐらい低減したか、てまり団地はどうなったか、川西団地はどうなったかということ調査いたしまして、さらに問題があれば微調整、配水系統のバルブ切替え

でございますけれども、そのようなことをやりたいと思っています。先ほど町長答弁いたしました、この辺りがうまくいけば、黒崎水源の水は非常時バックアップ水源として殺さずに残しはいたしますが、ふだんは配水はしないという今のところの計画でございます。

○議長（仙海直樹） 1番、小黒議員。

○1番（小黒博泰） ありがとうございます。数字というか、ほかにいろいろあるんですけども、どの程度の大釜谷の水を黒崎水源まで持ってきてという、今の話聞くとどうしても黒崎水源の井戸、水源自体を残したいという町の考えなのかなと理解しました。

その中でもって、ちょうど今課長答弁いただいたので、時間もないですけど、1つ私水質の関係で聞きたい。これ町のホームページに今回の水質検査の一覧表が出ています。その中で、私も過去5年間のデータをずっと見させてもらった中で、51項目の水質検査で全部基準値以内でクリアしているのは分かるんですけども、その中で1つだけ気になったのが、これは大したことではないんですけども、51項目の中の水質検査の中で塩化イオンという量があります。これは、塩化イオンは普通に塩化ナトリウム、塩というか、塩分なので、人間には大した影響はないんですけども、数値的なもので、これは海岸地区、海岸公民館で取ったデータなので、この水源は多分上中条の浄水場ですかね、水源的には。この中で2月3日まで、過去5年間もそうなんですけども、大体さっき言った塩化物イオンというのが平均30.8ぐらいなのが、3月3日の検査ではいきなり19.4まで下がっています。逆に西越地区、赤坂山配水処理場ですか、そこで取った水質検査でいくと、そこは過去5年と2月3日までは塩化物イオンが平均18から19ぐらいのデータで来ているのが、3月3日にいきなり29.8にまで上がっています。これは、データの的に本当にこれだけ上がったのか、それともただ単にこちらの行政のほうのデータの入れ間違いなのか、その辺ちょっと確認したいんですけど。

○議長（仙海直樹） 建設課長。

○建設課長（小崎一博） 化学の専門的な内容でございますので、塩化物イオンがどういったものかというのは私もこの場で細かくは申し上げられません。寒い時期、3月になると海岸地区に給水しております上中条系の水源、あとは赤坂ですから、松本水源でしょうか、なぜ3月に数値が上がっていると、本当なのかどうかということは、今手持ち資料ございませんので、再度水質検査の報告書を確認してお答えさせていただきたいと思います。

○議長（仙海直樹） 1番、小黒議員。

○1番（小黒博泰） 塩化物イオン、その字のとおりなんですけど、塩化物イオンとは、調べて、簡単ですけど、水中に溶解している塩化物の塩素分のデータになります。これは国の飲料水の基準でいくと200ミリ以下ですか、なっていますので、基準的には全然クリアしているんで、ましてや塩化物イオンというのは、別にあれですけど、人的汚染というか、そういうふうなのでいくと、し尿だとか下水とか工業排水、あと塩素殺菌剤などでもってその数値が上がってくるというのが言われています。普通に人的には、ただ塩なので、塩化ナトリウムとして食品加工とかにも実際使われてい

ますし、特にただの塩というか、塩分なんで、体にはそんなに、大量摂取しなければ問題ないと思うんですけど、さっき言ったように、過去5年間とかずっと見てきている中で、突然この3月3日に変動が2か所であったので、質問させていただきました。町の水質検査計画でありますけれども、私最初に言ったように、蛇口から出る検査は毎月やっているが、大本になる原水のほうもやっぱり地下水をくみ上げているわけなので、いつどこでどういうふうになるか、今の異常気象の中で、今年みたいに雪が何もなければ、やっぱり地下水の水の層ですか、その移動もかなり変わってきているし、集中豪雨等で一気に雨が降れば、その雨で地下に浸透する場合に、またそういうほかの汚染物があれば地下のほうに浸透していきます。その辺で、原水も年1回となっていますけれども、それを2回とか3回とか、少しでも期間を狭めて安全な水を供給していただきたいと思います。

これで終わります。

○議長（仙海直樹） この際、しばらく休憩をいたします。議場の時計で午後1時10分より再開をいたしますので、よろしくお願いいたします。

（午前11時59分）

○議長（仙海直樹） それでは、休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後1時10分）

◇ 高橋速円議員

○議長（仙海直樹） 日程第1、一般質問を続けます。

次に、4番、高橋速円議員。

○4番（高橋速円） お尋ね申し上げます。

海岸地区空家等再生まちづくり事業についてということでお尋ねいたします。通告書に疑問点を記してございますが、旧津又商店が、今これから改修等々工事入るんですけども、その完成の暁に来年から展示が始まるということなんです、担当からお聞きしている中では、今までと同じような、今までとというのは、私が申し上げたいのは、出雲崎町の中の普通の展示方法がずっと踏襲されているわけですが、それと同じような形で旧津又商店のところを日本遺産のガイダンス施設というふうな形にしようということなんです、それについてはどうも若干疑問もあるものですから、お尋ねすると、こういうことなんです。

それで、まず1点目、展示方法をいろいろ考えに考え抜いて、これから、提示している、今の計画されている今までと同じような踏襲する展示方法なのか、いろいろなことをまだ考えているんだということなのか、その辺を一応念のためにお尋ねいたします。その辺町長、いかがでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） このたびの改修する旧津又邸の展示方法についてのご質問でございますが、津

又邸につきましては、これまでもいろいろな具体的な利用計画等を考えながら定まらず、空き家となつてまいったところでございますが、このたび議会の皆さんにもご説明を申し上げますように、外壁の改修と併せまして町家造りの内部の一部を見学できるようにすると、展示室を設けることになるんですが、ご承知のように建物は建物でございますので、大規模な改修工事は行わないと。トイレとか冷暖房等々の施設の整備は予定しておらないというところでございます。具体的な展示につきましては、これから妻入りの街並景観推進協議会あるいは関係団体の皆さん、また地域の方々とも意見交換しながら検討してまいりたいというところでございますが、今のところあまり大きな経費をかけることなく、現在の既存の町家造りを生かしながら展示場ということを考えておるところでございます。また、日本遺産に認定されました8件の構成文化財や出雲崎の海運史などになっていると思いますが、妻入り会館とか歴史や五郎兵衛などの施設などと十分連携しながら、分かりやすく展示ができるように進めてまいりたいというふうに考えておりますので、ご理解をいただきたいと思っております。

○議長（仙海直樹） 4番、高橋議員。

○4番（高橋速円） 分かりました。冷静に見て、出雲崎のいわゆるそういう展示資料館というんでしょうか、そういう施設は良寛記念館も入れますと、良寛記念館と天領の里の時代館、それから妻入り会館、そして歴史や五郎兵衛ということなんですが、みんなこれ考えてみますと、良寛さんもそうですが、江戸の中期、近世から近代にわたるいわゆる明治初期、この中のほんの一時代なんです。それを幾つもの場所で似たような展示物がある。特に後段この後触れますけれども、北前船は現実的にもう天領の里にかなりのものがあるんです。そこにありながら、なおかつこちらでガイド的施設という、どうもちょっと理解が、私の中では何か被るなど。被らなくてもいいのではないかとということなんです。

それと、もう一つ、私が展示方法等々でいかなもんかというふうに思っておりますのは、指摘をしたいのは、特にスタッフというか、管理体制で、今いろいろ中核を担っている諸団体がありますけれども、この構成メンバーと申しますか、皆さん方は大変一生懸命頑張っておられるんですけど、また優秀な先輩ですが、かなりの年齢を重ねた方々ばかりなんです。その次の世代がおられない。ここがこれからの出雲崎の弱点なんです。ですから、今町民総ガイド化事業、この後同僚議員の質問もありますんで、それはあまり触れませんが、ガイドの知識を増やすためのことはいいとしまして、ガイドということになったら、例えばあれはやっぱり現場に立たなかったら意味がないです。いろいろな来町者の方々と町長発信、それはいろいろな形で対応するという、それはある意味でのスキルアップなんです。これは現場でしか鍛えられないんです。知識だけ集めても駄目なんです。教養を高めても駄目なんです。そうすると、早めに若い方が現場に立って、そして来町した方々にいろいろな説明をします。これからおいでになる方、かなりやっぱり教養豊かな方というか、勉強してくる人がかなりいると思うんです。そういうことにも対応しなければならんということに

なりますと、非常にこれは運営とか管理体制等々はかなり、今までのただこういうことをしたから、これでいいんだというのでは追いつかないのではないかなと。だから、その辺を先ほどの午前中の質問であれば中川議員が北前船に関わるいろいろな知識等々、いろんな観光資源が出雲崎にあるんですけども、それをもう一回出雲崎に来たいと思わせるようなガイドなり、あるいは展示の方法を考えていきませんか、ただ施設はある、資料はある、これだけでは一過性に終わってしまうのではないかというのが1番目の質問のポイントなんです。その辺について、この私の意見について感想ございますか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） この後また町民総ぐるみのガイド等の養成というご質問も出ておるわけですが、現実的に申しまして、本当はこういう施設、例えば良寛記念館のように学芸館という、学芸員の資格を持った方がおられまして、成長しながら、どういう方がおいでになってもその展示なり内容について説明ができるというのが本来の形ですが、しかし現実的にはなかなかそういうわけにはまいらない。そういう中にもやっぱり町の中でも非常に歴史に対して造詣を持ったり、あるいは興味を持ったり、行動しておられる方々がございますので、そういう方々から応援をいただいておりますというのが現実でございます。

そして、今後そういう対応というものにつきましては、できる限り今ご要望のあるような若い人たちからそういう一つの出雲崎の歴史なりについてひとつ勉強していただいて、そういう方々から将来的にはご説明をいただくということは、ご意見のとおり期待をするところでございますが、そこまではまだいっておらないというのが現実でございますし、現実的にはなかなか難しいです。そういう若い専門的な立場の方々をお願いするということはなかなか難しい。それにはそれなりの施設を整えなければならない。私たちは苦肉の策と申しましょうか、現在の津又邸の施設の改修につきましても、苦肉の策として当面前船の資料展示室を設けたいということになっておるわけでございますので、私たちといたしましても、そういう専門的な、例えばそれを管理をする、あるいはまたおいでになる方々に説明をする、そういう専門的な歴史をひもときながら説明をするという方々、あなたにお願いしたいという方、それはおりません、今のところは。だから、そういうことについては、展示物についての説明書を添えるとか、施設の案内をしっかりと来た方に見ていただくと、あるいはまた当然そこに在駐いただく方々も勉強していただいて、ある程度のひとつご説明いただくというようなこと管理体制を整えてまいりますと、なかなかこれは難しい問題がございます。先ほど来から申し上げていますように、そういう規定の整備をするということになってまいりますと、天領の里はあれだけの施設とそれだけのまた説明するいろいろな機器も備えてございますので、おいでになった方々からもご理解いただけるんですが、私たちの今考えておりますところの北前船の展示、津又邸は、先ほどから申し上げておりますように、公民館の資料館にあるんです。3階まで行って見る人はない。そういうところの展示室を、貴重なものを一人でも多くの皆さんか

ら見ていただきながら、理解を深めながら私はやっぱりやっていきたいと。議員さんのおっしゃることは十分理解しますし、そういう形こそ本来の姿だと思うんですが、そこまで到達するのにまだ時間がかかるとは思いますが、そういうことを目指しながら、津又邸は全く暫定的なものですから、将来的にはあの建物は徹底的にどういう形で維持管理するかということは考えていかなければならん。ただ、行きつ戻りつの時間を費やしてもしょうがございませんので、北前船の展示室として、展示館として当面ひとつ活用しようということで進めてまいりますので、議員さんのおっしゃる趣旨は十分理解できます。現実的には難しいということだけ申し上げておきます。

○議長（仙海直樹） 4番、高橋議員。

○4番（高橋速円） 分かりました。この1番目はそう触れていられないというか、提案があるんで、これは一番最後に触れますが、2つ目に入りまして、先ほどの中川議員の質問の中で石積み等のことについては、町長はそれを全部保護する、保管するとかというふうな発言があったようですが、私はここの2番目で触れたいのは、その現場の大体細かいところからいうと、今の旧津又邸の裏回りからずっと点々、点々と住吉町にかけてあるんです。それは、昔の波がそこまで来ていたという証左でもあるんです。証拠でもあるんですけども、ただそれを今住んでおられる皆さんがそういうものだというふうな認識が、やっぱり町の啓蒙活動等々がないと分からないという危険性は多分にあるかと思えます。ですから、さっきの泊屋のところかというと、警察の裏のほうはまだ若干いいんです。だけど、泊屋のほうは半分ちょっと囲ってあるんです。だから、その辺は注意してというか、やはり町のほうでもう少しアピールしてほしいんです。そうでないと、稲荷町から岩船町等々、あの辺の皆さん方が全く、これは普通のあれだったらこんな古めかしいんだから、壊せと、簡単なほうがいいだろうというふうな認識になってもしょうがないんです。やはりその辺のアピールはどうしてもしていただきたい。要は今の町家再生エリア、この事業の町家再生エリアのところは、ある意味では再生しようということであるならば、余計昔のというか、一番出雲崎が栄えた当時の様子をやはりもう少し強く認識してもらい、知ってもらいという必要性私あると思うんですが、その辺どうですか。やっぱりもうちょっと働きかけてやってもらいたいんです。私も一応一町民ですから、いろいろ言いますけど、やっぱり若い方々がそういう認識に立ってもらわないとまずいのではないかと思うんですが、いかがですか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 先ほどちょっと中川議員さんのご質問にもお答えをしていますが、警察跡地の石垣は完全にコンクリで巻かれておると。全く歴史的な価値は何もない。また、北前船との関わりはないと。あれは波打ちのための塀であるということです。だから、仮にあの石垣が歴史的なものであるとするならば、保存方法としては、先ほど皆さんがおっしゃるように、警察跡地に北前との歴史的な関わりのある建物なり展示室なり、そういうものと一体的にその石垣の価値、重みを伝えなけりゃならん。単なる、警察跡地はあれは価値ありません、先ほど申し上げたように。日本遺産

だってそうでしょう。原形を変えたら徹底的に遺産にはならない。ましてや警察跡地はコンクリで巻いてあります。皆さんお分かりでしょう。コンクリですよ。波打ちを止めるためのコンクリですよ。私は、仮にあれが石垣であったとしても、そのために土地を売らない。それだったらその土地と合わせながら石垣と一体的に売り込むということで考えないと私はならんと。ただし、警察跡地の石垣は価値はないと私は判断します。もし歴史的事実があるということならば検証していただいて、あれがあれば考えますが、私はないと思う。あれは波を止めるための石垣ですよ。ただし、泊屋の問題は、あれは現実に本当に原形をとどめておる。そのものと、そこに泊屋さんの先ほどいろいろございました石の問題、池の問題、塀の問題、そういうものと一体的にかつての歴史を保存し、再現をしながら来た方々に理解してもらうということは必要だと思います。ただ石垣を残しておくことは私はいかななものかと思う。だから、やるとするならば、先ほどから申し上げておりますように、泊屋に拠点というものを設けながら、北前船のこれから検証をしながら、大勢の皆さんからご理解いただくような、将来的に期待をつないでいくべきではないかと私は考えています。

○議長（仙海直樹） 4番、高橋議員。

○4番（高橋速円） 石垣のことはあまりもう時間割きません。私もっと言いたいことがあるので、このことはちょっとまたいずれ何かのチャンスがあるかと思っておりますので。

3つ目に入ります。日本遺産のガイダンス施設ということで、旧津又商店をそういう施設にしよう。今の町長発言ですと、当面という、あるいはいろいろ考えに考えた末の暫定的なものだという、それは分かりました。ただ、あの中に日本遺産のガイダンス施設を入れる、日本遺産のもともとの認定された8つの条件ですか、その中で、先ほど船歌が出ましたけども、あと出雲崎おけさもこの中に入るわけです。船絵馬と、それから艦旗や絵馬等、いろいろあるんですが、私ここで特に申し上げたいのは、旧津又邸のところに入れる出雲崎おけさをどのような形で入れられる予定なのか。改めて、今プランまだ途上だと思っておりますので、1つ申し上げておきます。

出雲崎おけさに大きく歌い方で2つあるのをご存じですよ。一々ここで聞きません。だけど、私は小町南山さんとか、あるいは牧野さんとか、この皆さんはおけ一さと、こう高く出てどんと下がって上がる、こういう歌い方なんです。ところが、今のいわゆるチャンピオン大会でやっているのは下から普通のおけさ。これはなぜ今の形になったかという、チャンピオン大会のときの地方の三味線の皆さんが、つまり楽譜を統一しなくてはいけませんから、そうすると地方がついていけない。あるいは、おはやしをどこに入れるかと、こういう問題があったと聞いています。これは、実ははっきり言って亡くなった例の婦人会の会長をした小池さんから聞いているんです。あのときに新潟のほうのスタジオまで行って音を収録して、そして何とかあそこへこぎ着けたと。いろいろな歌い方があるのは知っているのだと。知っているんだけど、ああいう形でスタートさせないとチャンピオン大会ができないんだというふうなことを私は説明を受けた記憶があります。だけど、おけさを日本遺産のガイダンス施設に入れるならば、やはり民謡の、あるいはお船唄もそうですけど

も、我々の出雲崎の先人の血と汗、生活のいろいろなものをそこにぶつけてきたわけです。そういうものが展示されるものであってほしいんです。ただ昔のおけさはこうでした、どこかへ出て歌いました、あるいは北前船のあれでハイヤ節からの流れでここがそうなんですぐらいのことでは、これはちょっと大先輩、先人の皆さんに私は失礼ではないかなと。おけさのよさ、小町南山さんの歌い方は私、牧野さんもそうなんですけど、最初から踊り出したくなるようなすごい迫力というか、リズム感で歌い出したんです。今はっきり言ってそういうパッションがあるかというと伝わってこない、残念ながら。だけど、それはどっちが正しいかというと、両方正しいんです。どっちが間違っているじゃないんです。みんな正しいんです。それはそれでいいんです。いいんだけど、この出雲崎の大地の中でそういう楽曲が生まれて、そしてそれが次の佐渡なりなんなりにまた伝播されていたわけですから、そこら辺は町長の認識はどうか伺いたいんですが、その辺おけさをどういうふうに取り上げますか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 議員さんおっしゃるように、この出雲崎おけさ、伝統ある歌です。我々も本当に未知なれどもそのおけさを聞かせてもらっておったんですが、小町南山さんとか歌われた出雲崎おけさ、これまた趣のある、情緒のある歌でした。それは、やっぱり今議員さんおっしゃるように、全国大会に合わせて出雲崎おけさの普及版ということで、ちょっと新しいアレンジをしながら出雲崎おけさとはこうですよという普及版ができたわけです。それで歌われているんですが、我々、若い人たちが聞けばこれが出雲崎おけさだということですが、歴史的にはやっぱりかつての先人が歌った出雲崎、南山さん等の、私は田中さんや皆さんの歌を聞いておるんですが、全くまた今のおけさとは違った趣があるんです。だから、今の出雲崎おけさは普及しておるんですが、そういうかつての先人が築き上げた歴史、伝統というものはやっぱり残していくべきだなと私は思っているんです。だから、この後QR、VRの展示室の議員さんのまたご質問いただくわけですが、施設としてはなかなかそこまで整った施設ではございませんので、そこまでは手はちょっと届きませんが、先ほど中川議員さんが質問されたお船唄、あのようなものはやっぱりできたら展示室で来た方々にお船唄ぐらいを流して聞いていただくような施設が必要じゃないかなと思っっているんです。歌というのはやっぱり歴史を伝えますから、出雲崎おけさも、私は出雲崎おけさは歌われませんが、趣としてはやっぱり歴史ある南山さんが歌った、テープレコーダーもあります。もらっていますが、あれはやっぱり趣もあります。だから、すべからく近代的なアレンジするよりも古きよきものは残すべきだと私は思っています。そういう意味でやっぱりいろいろ皆さんのご意見もありますので、また十分熟慮、考慮しながら進めていかなければならないのではないかと思っています。

○議長（仙海直樹） 4番、高橋議員。

○4番（高橋速円） 今町長が逆にもう先に私の提案のことに若干触れられますので、そちらに入ります。私、今多分町長はそういうふうな答弁なんだろうと思うので、逆にこれを先に書いてあるん

ですが、いわゆるバーチャルリアリティという、そこに仮想現実を出す。そうすると今まで町で保存してあるいろいろなデータというか、映像資料があると思うんです。そういうものをその中に入れる、これは十分可能だと思うし、さっきの泊屋とか何かの、そういうあの一带もこうやってのぞいたらバーチャルリアリティでそこに再現させられることは今のテクノロジーの時代はできるわけですから、今すぐやれとかという意味ではないんですけど、ただそういうふうな形の展示の仕方を、出雲崎は取りましますよとなると、絶対あちこちみんなそうなると思うんです。ただ、それはそうしたらやはり一歩先にそういう形を取り入れて、そしてただ同じ見せるんですけど、そこに動画として、そしてまた音も入るという形で見せれば、これは先ほどの人的なガイドなりなんなり、管理体制とか、いろいろなものの不足分をそっちで補える、十分これからのものに対応できるような内容になるのではないかと私は思うんです。

東京の台東区では、もう一つ挙げているQRコードとあって、そうすると普通のスマホをちよいと合わせるだけで、QRコードにぱっと合わせると、詳しい資料がそこにぱっと飛び出して出てくるんです。それを今東京の台東区、特に浅草中心でやっています。ですから、これも参考にしてください。これそうすると余計な説明はなくていいんです。それで、その質問に答えていくというふうにしますと、こちら側の受入れ態勢の人的な不足分をカバーできますから。だから、こちら辺も活用したほうが、私は出雲崎はやっぱり違うねというふうにどうせやるならやっていただきたい。

だから、一番最後にそういうことでコンペ方式で競争させると。特に学生さん等はそこら辺と一緒に参加してくれないかという、斬新なアイデアでいろいろなものが出てくるのではないかなというふうには私は思うんです。ですから、金をかけた変なコンサルとか何か、そんなの入れなくていいんです。出雲崎のものを食べさせてやるから、1週間寝泊まりして、データ作って持ってこいと言ったほうがよっぽどいいのではないかと私は思うんですけど、その辺私の今の提案についてどう思いますか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 議員さんの一歩進んだそういう展示あるいは説明の器具等々、そういう時代に入ってくるんでしょうが、残念ながら今のところは常設館といいますか、この施設の運営も五郎兵衛さんと同じように、毎日開館するというわけにはいかないんじゃないかというふうな今のところ考えているんです。だから、やっぱり曜日とか時間を区切った当面は開設になるのではないかというふうに一応考えておるんですが、常設館で今議員さんのおっしゃるような施設を整えるには、やっぱりある程度、天領の里の時代館とか、それまでにはまいらなくとも、確たる恒久的に北前船の拠点をつくるというようなことになってまいりましたら、当然その必要性出てくるんで、今のところちょっと、先ほど申し上げましたように、いかにその点を生かすかということで今苦肉の策でやるわけですが、長くはなかなか維持できないのではないかと。当然日本遺産に指定されたところも全国の16都道府県の45市町村が日本遺産指定されている北前船の寄港地なんですけど、当然全国

を持ち回りで一応のあれをやっていますので、出雲崎もその対象になる可能性がありますから、そういうときにある程度説明、北前船の寄港地としての歴史的な事実をしっかりとまたご説明申し上げるような、そういう機会も出てくるのではないかと思います、そういうことを目指してやっぱりこれからまた皆さんと協議をしながら、せっきく日本遺産、これはやっぱり出雲崎町の大きな一つの文化的な施設でもあり、また出雲崎を売り込むための機会かと思っていますので、そういう常設的な、ある程度恒久的な施設ができてまいりますればそういうことも考えてまいりたいと思いますが、今のところ若干施設としてはそこまでの近代的な設備を入れるだけのあれはないのではないかと。しかし、その中でも今議員さんおっしゃるような中で、少しでも何か前進的にそういうことを捉えてやるべきものがあるかどうかまた検討してまいりたいと思いますので、よろしくひとつお願いします。

○議長（仙海直樹） 4番、高橋議員。

○4番（高橋速円） 分かりましたが、そこで私もう一つ実は通告してここに書いていないんですが、1点ちょっと触れます。

せっきくここまで話ささせていただいていますので、質問させていただいておりますので、日本遺産のガイダンス施設なんです、そこにプラス出雲崎の、特に海岸地区のみこしの渡御、この祭りを何かの形で取り上げられないもんかなと思うんです。特に私、今祭り、海岸地区でみこし渡御という、石井神社のいわゆる出雲崎大祭と言われることだと思うんですが、これも町長ご存じだと思いますけど、尼瀬の諏訪神社のみこしもあったわけ。この2つは、片っ方はいわゆる大名行列を模したと言われている今の石井神社の祭礼ですね。これおはやしのチャンチャコチャンという、これ上り、下りちょっと違うんです。だけど、それと同じように尼瀬の諏訪神社のみこしの渡御も、今度これは京風なんです。京都の時代祭の、そういうあれを模して、だから石井神社とは違う行列の形が取られていたわけ。今そのもの残っているはずですが、これも同じくおはやしは、みこしの先陣を切るチャンチャコチャンと言われるおはやしはまた違う節なんです。つまり出雲崎のこの短い3キロの海岸線の中で東の文化と西の文化が激突しているんです。文化の激突があったんです。そういうことはなぜここで入れないのかなと。どんどんそれを知っている方々が年を重ねていくんです。やばいんです。これは一刻も早く手を打って、特にチャンチャコチャン等言えば笛です。笛が残っていれば何とかメロディーを再生できるわけです。太鼓は何かなるんです。だけど、笛が消えちゃったらもうどうしようもないんです。だから、これも早く手を打って、そしてこういう施設の中にこれをうまく取り入れて、そしてこの小さな町の中で2つの文化がぶつかったと。名古屋のほうの中京圏の文化の激突の仕方とまた違う形です。だから、みこしでいうと、石井神社のみこしはあおるといふふうに言いますね。今度尼瀬のほうの諏訪神社は走ると言って、最後走ったんです。私は本業が本業ですから、あまり立ち入ったことを言うと叱られますから、失言があってはまずいので、あまり熱は入れませんが、しかしこのことはどうしてもどこかで早く手を打

っておいて、出雲崎の一つの文化という形では激突していたということです。寺泊はそんなことないです。ほかでもないです、こんな形で残っているのは。だから、これは皆さん方当然ご存じだと思います。ご存じだと思うから、だけど通告にないので、質問しませんから。一応そういうとこだという認識でこの旧津又商店のところに、あるいは今後のいろいろな町家再生のところには力をぜひとも入れていっていただきたいという、これは一つの提案なんですけど、この提案について町長、どう思いますか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 議員さんのお話を聞いて、ああ、そういうこともあるのかと、そういう歴史的事実もあるということをお話していただけたわけですが、やっぱりこれから出雲崎はこういう小さな町ですが、歴史的ないろいろなものがたくさんあるわけですが、そういうものを掘り起こしていくならば、価値ある、また出雲崎町の存在価値というのが示されるのではないかと思いますので、今みこしの話が出ましたが、そういう意味においてもかつてのそういう古きよき時代のみこしのいろいろな経緯等もあるわけですが、そういうものをどういう形で保存し、また掘り起こしていくかということは今後の課題でございますので、初めて私もそういうお話を聞かせていただいたわけですが、ひとつまたご提言をいただきながら、これからの、やっぱり今大変厳しい時代でございますが、町おこしというのはいろいろな方策あると思うんですが、やっぱりその町固有の他にない歴史遺産というものをしっかりと発掘しながら売り込んでいかなければならんというふうに思っていますので、出雲崎はそういう面では非常に大きな材料がたくさんあるわけでございますので、今後それを掘り起こしながら、これからの町の再生に生かしていかなきゃ駄目だと思っていますので、またそういう貴重なご意見がありましたら、ぜひひとつまたお聞かせいただけて、生かしていきたいと思っています。

◇ 三 輪 正 議員

○議長（仙海直樹） それでは次に、7番、三輪正議員。

○7番（三輪 正） では、関係人口の増加で町活性化をということで、関係人口というのはあまり今までこういう言葉は出てこなかったわけです。今までは交流人口、特にそのために観光客を増やそう、イベントをして多くの方から来ていただくということでやったんですが、それですとどうしても一過性で終わってしまうんです。だから、それを今後は一応関係人口ということで、出雲崎に生まれて町外に行った方とか、そしてその後出雲崎で勤めていた方とか、そういうふうな関連の方にずっと出雲崎のファンになってもらおうということが関係人口でございます。

今政府も昨日から新しい政権が発足しました。以前の安倍政権のときも地方創生ということで、非常に私らも期待してわくわくしておったんですが、残念ながらあまり私らの期待のどこまでいっていないということだったんです。ただ、最近やはり新型コロナウイルスの関係でしょうか、全

てが東京なりそちらに住んで、そちらで仕事しなきゃ駄目だというふうなことはちょっと薄れてきましたし、それによってテレワークですか、そこにいなくとも仕事ができるというふうな形に今なってきていますので、1つは将来的には出雲崎に移住というか、またもう一つ、2か所移住ということがあって、都会に住んだり、また時々地方へ住んだり、そして仕事をするというふうな形がこれから増えてくると思います。そんな形で、私は交流人口から関係人口を増やすようにぜひ力を入れていただきたいということで、そんなことでありますが、1番の当町の関係人口の取組について、実際はないんだかも分かりませんが、それと交流人口、その辺の町の取組について伺いたいと思います。お願いいたします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 三輪議員さんのご質問、関係人口の増加で町の活性化ということでご質問いただいておりますが、関係人口ということについては、今議員さんからご説明をいただいたとおりでございますので、やっぱりそういう方向にこれから向かっていくだろうと思っています。最近は何でしたか、旅行して楽しみながら、行き先で交流したり勉強したり、いろいろなのをやる拠点づくりすると、これがまた一つの目玉になるようですが、湯沢町が今モデルに指定されるんじゃないかということが言われていますが、関係人口というものについてはこれからの生活様式なり、あるいはいろんな関係の中で大きく注目されてまいるんじゃないかと思っています。町においても今第2期の出雲崎町まち・ひと・しごと創生総合戦略、この具体的な基本目標の一つに様々な人間が関わり、訪れ、交流する町づくり、これを掲げて、もう既に今議員さんがおっしゃる関係人口なりいろいろな面のこれからのやっぱりまた目標となる、そういう一つの時代様式の変わり方の中における自治体のありようが問われているところでございますが、町もまずそういう問題にもう既に取組をしておるといことも事実でございます。そういう中に例えば具体的には進めておりますことのまるごとオーナー制度や、あるいは県内外のいろんな人々からおいでをいただいてオーナーになってもらったり、多様な関わりを持つ機会をつくっているわけでございますし、また地域おこし協力隊の採用とか、いろいろな意味の出雲崎あるいはまちづくりをしている地域資源、いろいろな面の情報発信をしながら、この町も今議員さんおっしゃるような方向の中でやっぱり進めてまいらなければならないということで考えておりますが、さらにコロナ関係とか、いろんな意味で生活様式も変わってまいりましたし、また大きくふだんのいろいろなありようが問われている中でございますので、時代の変わりよう、要請に応えながら、新たなる機軸を打ち出していくべきではないかというふうに考えています。

○議長（仙海直樹） 7番、三輪議員。

○7番（三輪 正） 今町長のほうから世の中がかなり変化しているということをお聞きしましたが、当町は例えば東京出雲崎会、1,000人くらいの会員を抱えております。そのほかに新潟出雲崎会、あとふるさと納税の寄附者、そして東京藝術大学の生徒さんが毎年合宿に来ておられます。今年はコ

ロナの関係でなかったと思うんですが、そういったことで今まで何百人も、例えば藝大生の方も来られて、そして絵を置いていかれて、時々絵の寄贈があるわけでございます。そのほかにまるごとオーナー、今話出ましたが、こういった方も来てください、来てくださいではなくて、その後いかに関係を持つかということにもっと力を入れるべきではないかと、こう思います。

そのようなことで、先ほど2人の議員のほうから北前船ということで取り上げられましたけども、日本遺産の北前船、そしてこれから世界遺産の佐渡金山というふうなのでございますが、それぞれ出雲崎は非常に関わりがありますので、そういった関係で、やはり出雲崎と関係を持ちたいというふうな方もあると思うので、そういう方にはこちらから積極的に発信をして、そしてつながりを持って、またそういう方が例えば北前船であれば、出雲崎はこういうところでこういうふうな特色のある港だったんだというふうなことを大いにPRしたり、また来てもらうというふうなことが大事だと思うんです。

あと、ふるさと納税につきましても、ただ物を寄附して、返礼品をやるだけじゃなくて、その縁で何とか出雲崎からもっと人的なつながりも強めてもらって、最終的には何とか関係を持ちまして、じゃ時々出雲崎行こうじゃないか、また短期でもいいから、住んでみようとか、そして移住しようじゃないかというふうなのが最終的には結びつくと思うので、そういうふうなぜひやっていってほしい。

それで、決算委員会でちょっとお聞きしましたが、松本のひがし団地については20区画のうち16区画売れたということで、私の予想よりも早かったなど、そういうふうな、町は最終的にはいかに人口を維持していくかということが町の継続というか、一番大事だと思うので、そういう面でも最終的にはそういうところに結びつけたらいいのではないかと思いますので、その辺、町長、こういうふうな考えどうでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 議員さんのご質問でございますが、確かに先ほど来からの関係人口なり、あるいはまた交流人口、その中にやっぱり出雲崎町においでをいただいて、出雲崎町を理解していただきながら、将来的には出雲崎に住んでもらいたい。そのためにはいろいろな方策を施しているわけでございます。産業振興から、あるいは教育関係とか、あるいは子育てとか、いろいろな意味の方策を施しているわけでございますが、私は非常に喜んでいるんです。実はこの前、ひまわりハウスが1棟空いていたんです。そうして、募集をかけましたら、3世帯か4世帯応募があったんです。それも、若い夫婦と子ども連れというふうな方々が応募してこられるんです、町外。本当に私はその内容を見まして、おお、しかし出雲崎は理解いただいているのかなと喜んでいました。内容も、入居する一つの基準がありますので、若手夫婦と子ども2人の方が入居してもらうということに決定しましたが、やっぱりこれは言葉ではないんです。言葉のやり取り、ゲームじゃないんです。現実的に出雲崎というものを理解をしていただいて、出雲崎に住んでみたいと、住みたいという環境を

つくり出していかなければならない。それには行動していかなければならない。ただ言葉で切り売りしても駄目だ。行動しなければ駄目、行動。その意味において、私は今回のひまわりハウスの応募状況を聞かせていただいて喜んでいますが、だから、残念だ。この方が全部住んでもらえれば相当人口増えるわけである。というのは、おいでいただく方々の住んでおられるところ見ても、出雲崎を理解していただいているんだと私は思います。そういう意味で、単に交流、関係人口、そういうことだけではないんです。あらゆる方策をもって、とことんあらゆる一つの可能性を求めながら行動すること、行動。そういう中でお互いが力を合わせることによって出雲崎を理解していただき、出雲崎の人口を増やすと、そういう時代なんです。だから、おっしゃるようなそういう事業に対しても我々はやっているんです。そのものをどういうふうに変化をしていくかということについては、ご提案のようにより積極果敢に行動すると、また皆さんからのご提言もございますし、そういうものを受け止めてしっかりとやるということが大事だと思います。

○議長（仙海直樹） 7番、三輪議員。

○7番（三輪 正） 今非常にひまわりハウスのいい話をお聞きしました。それで、県内も例えば柏崎市ですとか、長岡市、佐渡市とか、小千谷市とか、いろいろこういうふうな関係でやっております。特に長岡市、柏崎市辺りはファンクラブというか、そういうものを募集しようと、関連の、感心のある方、今までの出身者の方とか、そういうふうな形をやっている、最終的にはやはり地元の特産品なりを大いに買ってもらおうと、また将来的にはこちらへ住んでもらおうというふうなのが目的でやっております。

それで、今全国のどこでもUターンというか、移住のことをいろいろPRしていますが、その中で連続1位になったのが大分県の豊後高田市がちょうどテレビに、昨日だと思うんです。ちょうど見まして、その方は非常に効果が上がっていると。担当の方は女性の方で、市役所の方ですが、8年今その担当をやっているというふうな形で、いろいろ来られた方の商売だとか、あと補助金とか、いろいろ担当をやっていますが、前にも私一般質問でお話ししたと思うんですが、何とか例えば空き家とか、例えばこういうふうな関係人口だとか、また移住だとか、そういう形でぜひ何か担当を設けて、あとは具体的なものでは建設課とかそれぞれあるわけですが、とにかく窓口の担当なりを私は設けるべきじゃないかな、そういうふうを考えるんですが、その辺町長、いかがでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 議員さんの質問要旨は、やはり積極果敢に町を売り込み、ふるさと納税なり、いろいろ皆さんからおいでいただくための専門的なセクションをつくって対応すべきではないかということでしょう。そういう質問でござりますが、それも一つの施策であろうと思いますけど、先ほどから申し上げていますように、こういう事業は単に1課で対応するんじゃなくて、やっぱり横の連携を取りながら、それぞれの課の関わりをしっかりと連携を取りながら、そのエキスをしっか

りとまた抽出をしながら売り込むということが大事だと思いますので、今そこに専属的な課を設けてどうするということは考えておりません。ただし、私はこの就任したときに皆さんに申し上げたトップセールスをしたいと。残念ながらコロナ問題で全く空振りに終わっております。今のところちょっとめどが立たない。私は、これは徹底的にやろうと思っています。それにはやっぱり課じゃなくて、そういう対外的な折衝なり、そういうものを専門的に担当するというか、責任を持って対処しながら、そして横の連携を保ちながらやるということが大事じゃないかなと思っています。そういう点は、三輪議員さんのおっしゃるように、少し考えてみます。私が対外的に出かけるにしても、私が直接交渉してどうするわけにはいかない。その連携をしっかりと会社なり企業、農業なり、あるいはいろいろな意味の、例えば企業誘致の問題もそうです。そういう問題に対して交渉に当たる。私が出向くにも、私が交渉するわけにはいかない。ただし、今総務課が大体やっていますが、総務課だけでは大変なんです。だから、今議員さんのおっしゃるように、そういう課なりセクションとしてやっぱり重点的に対応できるような体制を私は、議員さんのおっしゃるように、整えなければならぬと思っています。やっていきたいと思っています。積極的にやっぱり行動しなきゃ駄目なんです。徹底的にやらなきゃ駄目だ。言葉じゃ駄目なんです。書いたもので机上の空論では駄目なんです。実際にやろうと思ったら徹底的にやらなければ駄目だ。そのためには行動する前のそういう地ならしをしっかりとする。そういう専門的に対外的な交渉をする人がいないと困る。そういう点は少し考えてまいります。

○議長（仙海直樹） 7番、三輪議員。

○7番（三輪 正） 町長から今後考えていくということで、決して課をつくるとかいうことではなくて、今の課の中で何か担当者を、そして二、三年でくるくるではなく、そういう方はある程度少しやって、これは対外的にはつながりとか人脈だと思うんです。だから、何年かやっていれば、どこをはたけばこういうふうに関くかというものなるので、そしてそれと町長のトップセールス、これをぜひ両輪にして大いに雲崎をPRして、ぜひ呼び込んでいただきたいと思っています。今後期待しております。

以上です。

○議長（仙海直樹） この際、しばらく休憩をいたします。議場の時計で2時20分から再開をしますので、よろしくお願いいたします。

（午後 2時08分）

○議長（仙海直樹） それでは、休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後 2時20分）

◇ 高 桑 佳 子 議員

○議長（仙海直樹） 日程第1、一般質問を続けます。

次に、9番、高桑佳子議員。

○9番（高桑佳子） それでは、最後になりましたが、よろしく申し上げます。午前中の中川議員、午後から高橋議員、三輪議員からもそれぞれの観点から出雲崎の観光についてのご質問、ご意見があったばかりですが、私も観光ガイドのことから質問をさせていただきます。

出雲崎の歴史や妻入りの街並み、そして良寛さんは、言うまでもなく他町がまねのできない当町の誇るべき観光資源です。私自身、妻入り会館の管理人や観光ガイドの端くれとして活動する中で、このすばらしい観光資源を最大限生かして観光立町を目指してやっていくのか、これからの方向性と具体的な施策について伺いたいと思います。私たちもとにかく街並みに入って歩いていただきたいといつも考えています。案内看板や街並みの整備、様々な工夫を凝らした中で街並みを歩く方は年々増えてきているように感じます。来町者の方には、静かで歴史を感じるいい町ですねとよく言われるのですが、実はその歴史にしても、良寛さんにしても、ただ歩いただけでは残念ながら分かりにくい。しかし、観光ボランティアガイドを利用して一緒に歩かれたお客様の満足度は大変高く、お話が聞けてよかった、出雲崎に来てよかった、また来ますと言ってもらえるのです。私は、観光ガイドで丁寧におもてなしをして、出雲崎を知っていただき、出雲崎のファンになっていただく、それこそが、地道ではありますが、堅実な方策ではないかと考えています。

まず、(1)の今町が行っている住民総ガイド化事業、これも大変人材を育てるという意味で大事な事業だと思うんですが、これに対して町長が期待されること、これからどのように進めたいと考えておられるのかをお聞かせください。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 高桑議員さんのご質問にお答えしたいと思いますが、議員さんのご質問の中にもありましたように、おいでいただいて、この町へ来てよかった、また来たいというような、そういう気持ちの発露が伝わるということは本当にうれしいことだと思うんですが、これがやっぱり基本なんです。そういう意味で町民総ガイドという表現の中では、それは専門的なガイドさんもおられるわけですが、やっぱり議員さんおっしゃるように、町民の皆さんからよそから来た皆さんによるこそおいでくださいました、本当にありがとうございますというその気持ちで迎える、これが一番大事だと思います。そういうおもてなしの気持ちというものを町民の皆さんから、全て歴史をどうこうご案内するというよりも、本当によく来てくださいましたね、大歓迎だという気持ちを伝えるような環境をぜひ醸成するような形で町民の皆さんにこれからお願いしていかなくちゃ駄目だ。専門的なものについては、議員さんのご質問にもございますが、ガイドの養成なり、しっかりと案内を頼む、その方々は詳しく説明できると思うんですが、要するに何げなく町においでの方々のお迎えする気持ちが一番大事だと思うんです。私は常に申し上げている。議員さんのおっしゃるとおりなんです、そういうことを町民の皆さんから徹底してご理解いただいて、歓迎の対応をひとつ示

していただくような形をぜひつくり出していくようお願いをしていきたいと思っています。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） 町長のお考えも総ガイド化事業についてはこれからも進めていくということで、私もこちらのほうには大変期待しているところなのですが、昨年の観光おもてなし講座に参りますけれども、1月から3月にかけて全4回、町外からの講師も招いて開催されました。受講したいんだけど、予定が合わない方もありましたし、もちろん座学も中心になっておりましたので、1回は街並みを歩いたということなのですが、裾野を広げるという意味では効果的だと思いますので、これを年間通して開催するわけにはいかないでしょうか。盛りだくさんじゃなくても、例えば良寛さんをたどるコース、妻入りの街並みを感じて歩くコース、日本遺産の北前船のコースとか、一緒に歩いて、教えてもらうだけでなく、感じることもできる講座、そういうものが開催できるのかなと思います。年間を通した開催ができないかどうか伺いたいと思います。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今町は観光おもてなし講座、冬期間に実施しておるということで、議員さんのご質問はもう少し年間を通して回数を多くできないかということですが、町の今までの方針としては人が動かないときにテーマを決めながら実施して、そしてより効果が上がるんじゃないかという判断の下で冬期間に実施しておるのが現実でございますが、今お聞きしますと、大体おもてなし講座においでいただいたのは25人程度の方がおられるという回答なんですけど、やっぱりそういう講座においでいただく方々のお気持ちというか、いろいろなお考えもあると思いますので、そういう方々から率先してそういうガイド、いろんな役割を果たしていただくためには、よりもう少し回数を増やすとか、時期的な問題とか、いろんな問題をお聞かせいただいて、その中で適宜また冬期間だけではない、もう少し回数を増やすべきものは増やすというようなことの中で対応してまいりたいと思いますので、お集まりいただく皆さんのお考え、またお気持ちをお聞かせいただいて、より意に沿うような形で進めてまいりたいと思います。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） 広げていくということでご検討いただけるということなのですが、その次の(3)、まちあるきイベント、私これ非常にかかっていたんですけども、これとの絡みの中で、例えば今の観光おもてなし講座と一緒にするとか、以前にも何かそういう講座を総合大学と一緒に開催したということもたしかあったように思います。そういう意味では、このまちあるきイベントと一緒に考えていくということもできるんじゃないかなというふうに思っています。このまちあるきイベント、3年ぐらい前までですか、行われていたんですけど、あれは大変好評だったように思います。新聞広告も出して、町外からも多くの参加があり、リピーターも多くて、毎回楽しみにしていますと話される方もいました。「美食」街めぐりのような華やかさはないんですが、じっくりと街歩きを楽しんでいただける実のあるよいイベントだったと思います。交付金を使ってのものだったように記憶

しておりますが、終了とともに担当も替わったのか、ぱらっとやらなくなってしまった感があります。実際に何回も行っているわけですので、手を替え品を替え、タコ御飯を、あれはまるこさんででしたでしょうか、頂いたときは100人以上の参加があったように思います。そう大きくなくてもいいんですけども、本当に工夫して行ったイベントでしたので、そのノウハウも今持っているのだと思います。これはぜひ復活させてはいかがでしょうか。観光ボランティアガイドの中でも、あれはよかったよねという声は町民の方からも聞こえます。ぜひそういうふうをお願いしたいのですが、どうお考えでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） このまちあるきイベントにつきましては、平成28年度加速化交付金事業で年間7回まちあるきイベントを実施したという実績がございます。その後については、テーマを決めて毎年3回程度イベントを実施しておる。昨年は、北前船の日本遺産登録を記念したイベントを9月に実施したということでした。今年は残念ながら新型コロナウイルス感染症の関係で実施できませんでしたが、来年度以降もしっかりテーマを決めて実施してまいりたいということですが、私は今高桑議員さんがおっしゃるように、これは交付金事業でやる、そういうお金じゃなくて、より効果があるとするならば、できる限り大勢の皆さんから参加いただいて、こういう機会をつくり出しながら理解いただくということが大切だと思いますので、今までのまちあるきイベント等の反省に立ちながら、より効果的に、より実施の効果が求められるような形の中で検討して、積極的に進めていくべきじゃないかと私は考えていますので、その辺も今までのまちあるきイベントのよき点、また改めるべき点を改めながら、積極的にやっぱり私はこれは進めるべきではないかなというふうに感じておりますので、また検討させていただきます。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） ぜひそのように進めていただきたいと思います。

では、（4）なんですけれども、出雲崎小中学校の児童生徒に出雲崎を愛する心を培ってもらい良寛学習を9年間通して行っていますが、街歩きや美しい風景に触れる機会をもっと増やしていただきたい、そういうふうに感じています。これは、実を言うと以前に津南町のある研修に参加した際に、津南町の小中学生が苗場山麓ジオパークでの総合学習の中で山を歩き、滝を探して、見つけた滝に自分の好きな名前をつける、こういうことがあると講師の方から聞きました。とても衝撃的で、これは出雲崎の子どもたちにも積極的に町に出かけて行って、私の町のここが好き、ここが一番お勧め、そういうものに気づけたらすばらしいなと思うんです。もちろん私にも好きな場所がありますが、そこに立つと、ああ、出雲崎はいいなと改めて感じます。そういう気持ちからふるさとを愛する心を子どもたちにも確認してもらいたい、そういうふうにあります。今はコロナで授業時間が足りない中でこんな話もなんだかと思いますが、将来に向けてどういうふうにお考えかお聞きします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 良寛に関わりながら子どもたちに良寛の心を心として、またそれなりの生きざまをしっかりと体験してもらいたいと、これは町の一つの是とするところでございますし、進めてまいらなければならんと思っています。幸い、皆さんにもお諮りしておりますように、良寛記念館応援倶楽部ですか、仮称ですが、てまりの会、これを町民各位にひとつ参加をいただいて、結成をするということになっています。私は、これ大いに期待しています。これを単に良寛に敬慕する、そういう知識のある人じゃなくて、一般町民の皆さんから多数参加してもらおう。家庭的にも参加していただく。そして、今議員さんのおっしゃるような、やっぱり私は家族ぐるみでこの事業に参加してもらったり、そういう形の中で良寛さんに対する敬慕なり、あるいは良寛さんなりを理解いただく裾野を広げていかないと大変なことになると思うんです。私は、良寛記念館応援倶楽部に対しては物すごく期待しています。そして、これが私は最後のとりでじゃないかと思うんです。これを大いに活用して、そしてまず灯台下暗しじゃ駄目で、やっぱり地元の本当の良寛さん、よそにはない名僧良寛、この生きざま、そういうものを我々は改めてまた知る。そして、町総ぐるみで良寛に対する理解をいただく。良寛記念館応援倶楽部の結成がやっぱりこれからの良寛に対する一つの町としてのやりようの最後のとりでじゃないかと思っておりますので、徹底的に理解いただいて、こういうものを通してながら高桑議員のおっしゃるような裾野を広げて、家族ぐるみで子どもさんにも広げていく。学校の授業というのは決まっていますから、だからそういう授業時間ではない余暇を利用して家族ぐるみで参加する、そして一緒に良寛記念館なり、あるいは虎岸が丘あるいはその辺を散策しながら良寛に対する思いやりを深めるということは私は大事だと思う。私は、良寛記念館応援倶楽部を通して今おっしゃるようなことを進めてまいるべきじゃないかと思っていますので、良寛記念館応援倶楽部の結成はぜひひとつ、私たちも全力を挙げて取り組みますが、議員さんたちからもご理解いただいて参加いただきたいなと思っていますので、よろしくお願いします。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） 良寛記念館応援倶楽部、子どもたちだけではなく、保護者の方たちも皆さん巻き込んで、町民の方も巻き込んでというお話ですので、それをぜひ進めていただきたいと思います。

先般私ある町民の方から言われたことの一つに、出雲崎頑張っているよね、頑張っているんだけど、例えば良寛記念館とか街並み、北前船もそうなんだけれども、それだけを前に推し進めていってもなかなかほかの町外の方からは分かりにくいよね、全国を見ると、例えば全然関係なくても食で人を呼んできてそこに持っていく、それ以外のもので総合的に、うちでいえば良寛、街並み、そういうところに持っていくという柔軟な考え方を持ったほうが町としてはいいんじゃないのというお話もいただいて、私もああ、そういう考え方もあるんだなというふうに思いました。だから、例えば良寛さんは私たちが敬慕する偉大な歴史上の人物ではありますが、やはりそれだけを前に押し出していってもなかなか分からない。簡単に言えば、テレビで放映されている一休さんのほうが全

国的にはとても分かるわけですから、やっぱりそここのところを、どうしてもどうしてもそこに行くのではなく、もっと包括的に見た中で進めていくという、ちょっと柔らかい気持ちも持っていていいのかなというふうに感じていたところもありました。ぜひこの良寛記念館応援倶楽部進めていただきたいと思います。

そして、(5)に入るんですが、出雲崎ふるさとの語り部について、人材の充実を図るとともに、現在の利用方法を見直しをいただく考えはないか伺いたいと思います。まず、ガイド料金の見直しをお願いしたいということが1つなんですが、団体ではなく、個人で訪問時に出雲崎を選んでガイドをしてくださった方、その方に現行では1時間1,500円、コースによって違うんですけども、ここは基本のところだと思います。1時間1,500円、2時間だとプラス1,000円、3時間でももうプラス1,000円ですので、例えば3時間のコースですと3,500円になるわけです。やっぱりちょっとこれは高いのではないかという感じがしますし、お金を払うならと利用しない要因の一つになっているのではないかと思います。全国の観光地には、観光ガイドは無料というところもたくさんあります。初めにお話ししたように、出雲崎を楽しんで好きになっていただくためにガイドの力はとても大きい。できればこれ無料にして、ガイド料については町が面倒を見ることってできないものでしょうか、ひとつお伺いします。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 天領の里にガイドを常在、それにつきましてはボランティアガイドの方々にいろいろ状況等をお話ししながら聞き取りをいたしました。常駐はなかなか厳しいとおっしゃっておりますし、時間を決めての案内は十分可能だと。ガイドの方々も限られた方でございますので、やっぱり都合はありますので、今の現状の中で限りなく利用する方々の利便性を確保しながら頑張ってくださいようお願いもしてまいります。常駐はちょっと厳しいということでございます。

また、料金につきましては高額という認識は、担当からお聞きしますと、あまり利用される方には料金が高いというような認識はないというふうに聞いております。また、料金の高い、安いによってガイドの利用が増えるわけではないのではないかと考えております。

また、インターネットからの予約については、現状では対応できる組織にはなっておりませんが、現在の語り部の方々では対応できないそうでございます。観光協会が一般社団法人化し、ボランティアガイドの取りまとめなどを行うようになれば可能かもしれないが、これにつきましてはもう少し時間がかかるんじゃないかというふうに考えておりますので、天領の里における常駐は厳しいと。料金については、議員さんの意見ですと高いということですが、利用する方から高いとかというような話はあまり聞いておらない。そういう形の中で、当面はこの状態の中でできる限り利用される方々にご迷惑かけないように進めてまいりたいというふうに考えておるわけでございます。また、その辺はしっかりと利用する方々、あるいはまた案内をする方々等々の実際の生の声をしっかりと聞きながら、改善すべきものがあれば改善していかなきやならんというふうに考えています。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） ガイド料が高いか安いという話になると、別にいろんな県外でも県内のほかの自治体でもガイド料金を取っているところから比べれば、うちのガイド料はそれ相応だと思います。ただ、私が言いたいのは、ガイド料を無料にするということは投資ではないかと。要するに出雲崎の町を売り込むための投資。これは、ガイド料を無償化するというのはお客様からもらわないわけで、町としては何かしらそれを負担しなければいけないことになるわけですが、それとて金額的に、効果はもちろん絶対あると思います。効果はあるけれど、経費的にはそうかからず済む話なのではないかなというふうに考えています。

昨年歴史や五郎兵衛が開館いたしまして、街並みをざっと見渡した中で、四季彩小路もあり、天領の里から中に入らずにご案内して、良寛堂を抜けて五郎兵衛まで行く。五郎兵衛まで行くコースというのは非常に見どころ満載で、良寛記念館も含めての話ですけれども、非常に充実したご案内ができるいいコースだと思います。歴史や五郎兵衛一つだけ取ってみても、先般若い女性がお一人で来られて、カメラでいろいろ撮っていかれたんですけれども、歴史や五郎兵衛の中に入って、奥の出し棚のところではすごい、やばいという声が、そればっかりの繰り返しだったぐらい感動されて、また来ますと言って帰られました。そこで、歴史や五郎兵衛は2人土日には常駐していますので、いろんなご案内ができるんですが、やはりそういうところで非常に感激してくださる。それは、やはり街をただ歩くだけでなく、ここの小路はどうです、ここの家は、ここの建物はということをお話する中で、そういう歴史があるんですか、そういうことがあったんですか、ああ、そうですねというふうに相づちを打ちながら一緒に歩くというのが私はとても大事だと思うんです。ですので、五郎兵衛ができてコースとしてはかなり固まったという言い方おかしいかもしれませんが、一つのコースの基本ができていような気がするんです。ですので、そこを回って天領の里に戻ってももちろんいいわけなんですけれども、例えば土日だけ2人ぐらいが天領の里に常駐して、無料ガイドという旗を立てておけば、もしかしたら本当に町を歩いてみたいなと思っているけど、どう歩いていいか分からない方を拾えるかもしれない。そうしたら、無料ですよ、ぜひぜひ見ていってください、聞いていってくださいという形で街歩きをご一緒して、やっぱり出雲崎のファンをつくっていただく。今こういう時代ですから、SNSでこうだったよ、よかったよと言えぱっと広まる時代です。一人一人の出雲崎に対する見方というものが大きく後々の結果に反映してくるはずだと思いますので、ここのところぜひ、ガイドは確かに今高齢化進んでおります。とても1日通して毎日毎日何時間も街を歩くわけにはいかないかもしれませんが、でもこれから例えばガイドを、ほかの事業やっているわけですね。総ガイド化事業やっているわけですから。これから若い方の中にもガイドを志し、やってみてもいいよという方が出てくるかもしれない。将来的にはそういう方たちに一緒に街を歩いていただく人材を増やしていかなければ、もう先細りなわけですね、今の方たちだけに任せておけば。だから、若い世代も興味を持てるようなガイド化事業

を進め、若い方たちも参加できるような観光ボランティアガイドの制度を見直し、料金体系をしっかりとさせ、あしたの出雲崎につなげていく、そういう考え方が私はやっぱりこれから出雲崎を売り込んでいく中で大事なことなのではないかと思っておりますので、これは絶対に投資的なことになると思いますので、ぜひお考えいただきたいんですが、いかがでしょうか。

○議長（仙海直樹） 町長。

○町長（小林則幸） 今の質問を受けながら担当に聞いてみたいことがたくさんあるんですが、一般質問の席でございますので、改めてガイド料金がどの程度なのか、またガイドをする方々の報酬等をどのように考えているのか、あるいはおいでいただく方々の気持ちがどういう気持ちであるのか、お金ではないんですね。やっぱり出雲崎はそういう、頂くものは頂かなきゃ駄目なんです。でも、やっぱり基本的には先ほど来からそれぞれ議員さんからお話がございますように、いずれにしてもよそからおいでいただいて、議員さんのおっしゃる関係人口とか、いろいろな意味において出雲崎を理解してもらうためには、やっぱり受け入れる側の精神、気持ちを伝えるということが大事なことです。ああ、出雲崎はよそと違ってこういうことをやるのかというような、そういう対応が大きなまた価値観を生むんですね。だから、そういう点につきましては、今ここで無料にするとか、時間をどうするということはまたよく現実をお聞かせをいただいて対応すべきもの、改善すべきもの、進めるべきものは進めるということで対処してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） ぜひ前向きにご検討いただければと思います。よろしくお願ひいたします。

最後に、取ってつけたような話でなんなんですけれども、ふるさと語り部ガイドの利用をインターネットからアクセスしようとする、実は意外と難しかったりします。というのは、町のホームページからはなかなか入りづらいところがあり、町の観光のページからですと、ガイドというところもあるんですが、ガイドのページを開いてもガイドマップやら何やらが出てきて、語り部のところには行かないという状態になっています。これは、ただ観光協会のホームページには大変立派なきれいなボランティアガイド語り部のページがあり、そこと町のホームページの観光からも入れるようになっていけばもう少し見ていただける方が増えるのではないかなというふうにも思います。出雲崎に行きたいと思ったときに、出雲崎と入れたときに、一番検索のトップに来るのは出雲崎町のホームページですから、やっぱりそこから入ってくる方は多いと思うんです。ですので、ぜひやっぱり出雲崎のホームページからも語り部のページにアクセスができるようにしていただきたいと考えています。いかがですか。

○議長（仙海直樹） 町長。今のホームページ、インターネットからのアクセスについてなんですが。

○町長（小林則幸） 今の内閣発足いたしました、今時代はIT時代とか、いろいろな意味のインターネットを使って情報化時代が先行するという時代に入ってまいりましたから、だから今高桑議員さんおっしゃる観光だけではない、ホームページ全体の出雲崎をいかに売り込むかということ

時代に即応した、より効果的に編集をし、また入力をするということは大事だと思いますので、今のご意見も聞きながらより効果的に、やっぱり皆さんからご理解いただくような形の中で進めてまいるべきじゃないかと思っておりますので、十分またご意見を尊重しながら今後進めてまいりたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

○議長（仙海直樹） 9番、高桑議員。

○9番（高桑佳子） お願いしたいと思っております。昨日報道で県が県外からの移住者に対して応援金を払うというようなニュースがありました。その中で知事が今人の流れが地方に来ている中で選ばれる町になる、そういうふうにおっしゃっていたので、本当にそうだなと、選ばれる町の努力をしなければいけないなというふうに考えています。出雲崎も訪れるにしろ、移住されるにしろ、ぜひ選ばれる町になるためにガイドの力を使っていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

これで終わります。

○議長（仙海直樹） これで一般質問を終わります。

◎散会の宣告

○議長（仙海直樹） 以上で本日の日程は全部終了しました。

本日はこれで散会をいたします。

（午後 2時53分）